資　料　編

Ⅰ　池辺寺跡の諸環境

1　自然的環境

(1)　熊本市の位置と地勢

熊本市は、九州の中部、熊本県の西北部に位置する。北緯32°48′00″、東経130°42′38″（市役所位置）に位置し、およそ東西24.1km、南北20.9km、面積は267.08㎢である。

市域の西北は金峰山系、北部・東部は阿蘇外輪山から延びる台地に囲まれ、南西方向に開けている。南部は低地で占められ、その西側は有明海に面している。

市の中央を阿蘇山に源を発する白川が流れ、坪井川・井芹川・加勢川・緑川などの河川がともに平野を形成し、有明海に注いでいる。

(2)　熊本市の気候

熊本市の気候区分は内陸型気候区である。金峰山系と阿蘇外輪山からの台地に囲まれる地形のため、内陸盆地的な気候条件となって寒暖の較差が大きい。

年平均気温は16℃程度で、夏の暑さと冬の寒さが厳しい。８月の月平均気温（1971～2000年平均）は27.7℃（最高平均気温は32.6℃）で、全国的にもかなり高いといえる。近年は、８月に限らず最高気温が30℃を超える日が多く、35℃以上の猛暑も珍しくはない。一方、１月の平均気温（1971～2000年平均）は5.4℃（最低平均気温は0.8℃）で、氷点下まで冷え込む日も多い。

年降水量は2000㎜弱で、６・７月がその４割を占める。梅雨期においても山間部に比較すると市域での大雨は少ない方であるが、集中豪雨が発生することもあり、2006年６月には１時間に86.5㎜の雨量を記録した。過去の水害では、主要河川の上流域（山間部）での集中豪雨によることが多い。

７～９月には台風も多い。上陸する台風の数は年によって偏るが、熊本市の西側を北上する経路の場合に大きな被害が生じることが多い。

(3)　池辺寺跡周辺の地形と地質

池辺寺跡を構成する主要な地区は、金峰山系の南東方向に延びた尾根と谷に位置する。金峰山系は第三紀末～第四紀更新世に生成した火山で、地形的にカルデラで、カルデラ内の金峰山・外輪山に分けることができる。池辺寺跡の所在する妙観山・朝出山・東平山・西平山などの金峰山から続く山々は、金峰火山の外輪山である。外輪山の山々は安山岩質溶岩を主として火山角礫岩・凝灰角礫岩、およびその二次堆積物で構成されている。

現在の井芹川を隔てた独鈷山も池辺寺跡に含まれると考えられるが、この独鈷山の北東側と南西側には一列に小山地が並んでいる。北東から岩倉山、立田山、茶臼山（熊本城）、花岡山・万日山、独鈷山、城山、御坊山である。これらの山々は地質的には金峰山系外輪山と等しく、立田山断層によって金峰山系側が沈んで切り離されたと考えられている。この断層上の沖積地に味生池が位置する。

(4)　池辺寺跡周辺の植物と動物

植生学的には、熊本市はヤブツバキを標徴種とするヤブツバキクラス域に属し、クスノキ・タブノキ・カシ類・シイ類などの常緑広葉樹（照葉林）が潜在自然植生の構成種となっている。

金峰山系、特に池辺寺跡周辺域では、スギ・ヒノキの植林地やミカン・ブドウ・モモなどの果樹園が多いが、その間にシイ・カシ・クスノキを主とした常緑広葉樹とクヌギ・コナラ・ヤマザクラ・ネズミモチ・

ヤマモモ・ハゼなどの落葉樹が混在した多種多様な雑木林が点在している。近年は、モウソウ竹が急速に拡大している。低木ではヒサカキ・シロダモ・クロキ・アオキなど、草木ではカズラ類やシダ類が目立っている。

豊富な植物に育まれ、市街地近郊としては動物の種類・数もきわめて豊富である。金峰山一帯は鳥獣保護区に指定されており、一年を通して多くの鳥の鳴き声が聞こえる。主にヒヨドリ・メジロ・ヤマガラ・シジュウカラ・ウグイス・ジョウビタキ・モズ・コゲラ・キジバト・コジュケイ・ホオジロ・キジにはよく出会う。

哺乳類では、イノシシ・タヌキ・イタチ・ノウサギ・モグラ・ネズミの他、まれにサル・キツネを見かけることもある。近年、イノシシの数が急激に増えている。昆虫類・爬虫類などの小動物も豊富であるが、近年の河川改修や開墾によってその種類と数は減少している。池辺寺跡（指定地）周辺でも、河川改修工事によってホタルやサワガニを見ることはできなくなっている。

2　社会的環境

(1)　熊本市の人口

熊本市の人口は、平成19年４月１日現在で661,385人（282,292世帯）である。熊本県の人口は平成19年４月１日現在で1,827,919人（675,771世帯）で、熊本市が県人口の36%強を占めている。人口推移としては、この一年間で883人増加している。

(2)　熊本市の交通

熊本市は九州のほぼ中央に位置する。ＪＲ鹿児島本線の中間点として熊本駅が本市にあり、これより豊肥本線・三角線が分岐している。また、一般道路では国道３号線が軸となり、国道57号線・266号線・387号線・501号線が市内において結束している。高速道路では、九州縦貫自動車道が市域を通り、市内には熊本インターチェンジが設置されている。空路は、阿蘇くまもと空港が熊本市の東に隣接する益城町に所在する。空港から市内中心部までの所要時間は、バスで１時間弱である。航路では、熊本市の西部に熊本港があり、島原・天草方面に渡航できる。以上のように、どの交通機関においても熊本市が交通の要衝となっていることがわかる。

(3)　熊本市の観光

熊本県の主な観光名所として、阿蘇・天草と並んで市内の熊本城・水前寺公園をあげることができる。熊本市の観光客数（平成18年）は約4,292,000人で、うち熊本城の入園者数（平成18年度）は988,434人である。平成４年までは入園者数が100万人を超えていたが、以後は減少している。

一方、城内にある熊本博物館の入館者数（平成18年度）は89,836人、市内各地の文化施設・記念館の入館者数（平成18年度）は合計で30,474人である。博物館や文化施設の入館者の多くは、市民の学校教育や生涯学習としての来館であり、観光客の入館は少ないようである。

(4)　熊本市の上位計画・関連計画

①　上位計画

ア　第５次熊本市総合計画（平成13年１月）

「緑と歴史を活かした個性豊かなまちを創る」

歴史的文化遺産の継承と活用：文化財を適正に保全し、積極的に活用する。

イ　まちづくり戦略計画（平成16年３月）

「豊かな人間性を育む教育・文化・スポーツの振興」

歴史的文化遺産の継承と活用：各種文化遺産の継承と活用に努め、市民の歴史認識や郷土愛の熟成を図ります。

② 関連計画

ア 熊本市都市景観基本計画（平成11年３月）

「人が集う 美しく活力ある『森の都くまもと』」

歴史に育まれた熊本らしさを構成している象徴的な場所の保存、活用

歴史を感じさせる風格ある都市を創る

自然風致景観ゾーン：ゆとり空間としての緑の保全活用。良好な眺望視点場の整備。

市民が愛着を感じるふるさとの景観。

イ 熊本市都市マスタープラン（平成13年３月）

「豊かな緑や歴史を生かした風格ある都市づくり」

熊本城をはじめ、歴史や緑などの特徴的資源を生かした「森の都」の都市空間の創造をめざす。

ウ 第２次熊本市環境総合計画（平成13年３月）

「自然と共生する風格ある「森の都」をつくる」

自然豊かな「森の都」を育てる

歴史的文化的資源を活かした公園の整備を進めます。

歴史遺産等を生かした美しい景観をつくる

文化財の保全：文化財の指定後も継続して調査し、維持保全に努めます。

埋蔵文化財の発掘調査：貴重な文化財の保存・活用に努め、後世に伝えます。

エ 第２次熊本市環境総合計画「地域別環境配慮指針」（平成15年２月）

Ｇ地域（西里・花園・城西・池上・高橋校区）

「歴史と自然が調和する緑豊かな環境づくり」

歴史遺産等を生かした美しい景観をつくる

オ 熊本市緑の基本計画（平成17年３月）

「水と緑と心豊かな「森の都」熊本」

感性を育み歴史文化資源を活かした緑を創る

西部地区：金峰山や有明海等の恵まれた自然の中で、豊かな緑と暮らしがともにある街を創ります。

(5) 関連法規（第11図、表８）

史跡指定地においては、文化財保護法第109条に基づく史跡として、同法第125条による現状変更の制限などがある。指定地および周辺域においては、都市計画法・都市公園法・森林法・農業振興地域の整備に関する法律や県立自然公園条例・都市景観条例などの対象となる。

3 歴史的環境

(1) 池辺寺跡周辺の遺跡（第２図）

① 旧石器時代

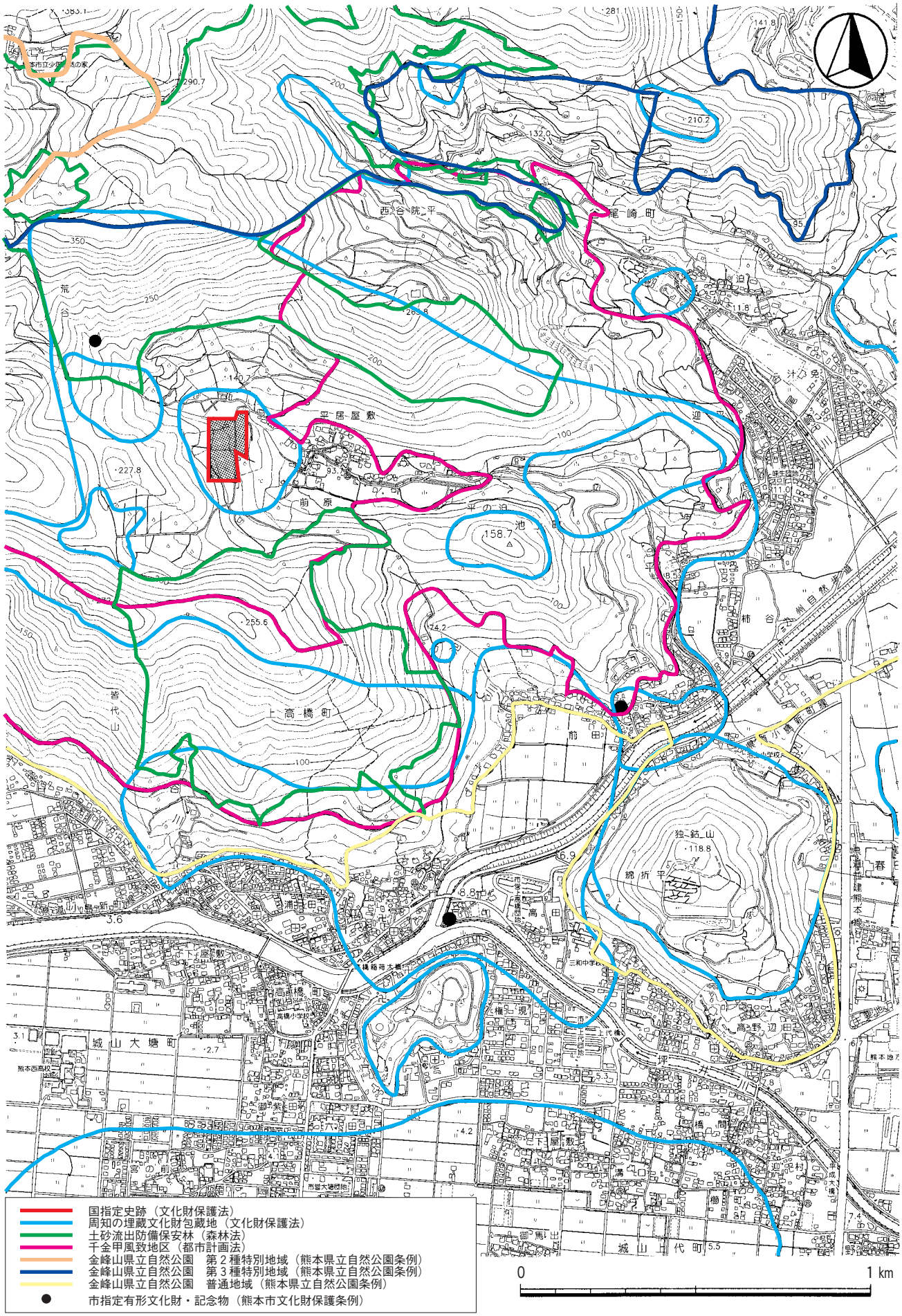
池辺寺跡周辺の地域では、旧石器時代後期から人間の生活が認められる。谷隠軒遺跡（谷尾崎遺跡）から細石核、高橋町遺跡群（上高橋遺跡）からナイフ型石器・尖頭器などが出土しており、他にも金峰山に連なる山間部では採集地として知られる所がある。池辺寺跡（百塚・烏帽子地区）からも、近年の発掘調査時に尖頭器・ナイフ型石器などが出土している。

所管局部課名		将来計画等への影響及び課題について	
教育委員会	生涯学習部	文化財課	
環境保全局	環境保全部	緑保全課	
		水保全課	くまもと水ブランド創造プラン（素案：平成18年10月作成）との整合
経済振興局	農林水産振興部	農業政策課	「農業振興地域の整備に関する法律（以下「農振法」という）」に基づく「農業振興地域整備計画」の「農用地区域」が存在する。当該地が開発され、農用地とすることが適当な土地に含まれない土地となった場合には、「農業振興地域整備計画」の変更（いわゆる農振農用地からの除外手続き）が必要となる。
		生産流通課	
		耕地課	現在計画している「団体営谷尾崎地区基盤整備促進事業」の区域が一部重複する可能性があるが、事業計画を作成している途中であり、池辺寺基本構想区域内に含まれるかは、現時点では定かではない。
都市建設局	都市政策部	建築指導課	
	都市整備部	開発景観課	
		公園課	
	下水道部	下水道総務課	
		河川課	
	土木部	道路整備課	
農業委員会		農業委員会事務局	
熊本県	農林水産部	森林保全課	
熊本県	環境生活部	自然保護課	

表８　史跡指定地及び周辺域に

関係法令等について	届 出 の 有 無	そ　の　他
·文化財保護法第92・93・94条（周知の埋蔵文化財包蔵地） ・文化財保護法第125条（史跡名勝天然記念物の現状変更等の制限及び原状回復の命令） ・熊本市文化財保護条例第10条（市指定有形文化財の現状変更等の制限）	・周知の埋蔵文化財包蔵地内において発掘しようとする場合は、届出·通知が必要である。 ・史跡に関しその現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をしようとするときは、文化庁長官の許可を受けなければならない。 ・市指定有形文化財に関し、その現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をしようとするときは、あらかじめ委員会の許可を受けなければならない。	史跡「池辺寺跡」 市指定有形文化財「金子塔」「池辺寺関係石造物」「池辺寺仏像」「池辺寺縁起絵巻」「池辺寺伝来宝物」「池辺寺古文書」など
・熊本市緑地の保全及び緑化の推進に関する条例 ・熊本県立自然公園条例		
・熊本市地下水保全条例、同施行規則	条例第10条による届出が必要である。	井戸を掘削することがある場合。
・農振法第15条の２第１項（農用地区域内における開発行為をするためには事前に都道府県知事の許可を受ける必要がある。）	都道府県知事の許可を受ける必要があるが、同項第１号にその例外として「国又は地方公共団体が行なう行為」が規定されていると同時に、同項第４号に基づく省令において「文化財保護法第92条第１項に規定する埋蔵文化財の保存に係る行為」という規定がある。	基本構想の策定においては、例外規定に基づき、農振法による「農用地区域」開発に対する制限は無いと判断するが、周辺農地への影響を考慮し、開発行為及びその影響については必要最小限に留めるよう配慮が必要である。
・森林法第５条による森林区域に該当。	地域森林計画に登載された森林（森林区域）を1ｈａ以上開発する場合は、県に対し許可申請が必要であり、それ以外の立木の伐採を行なう場合には、市への伐採届けが必要である。	
		谷尾崎地区基盤整備促進事業の計画エリアは、今回の整備計画（百塚地区）には含まれていない。（H21～25に事業実施を予定しているが、指定エリアを拡大し、当課事業エリアと重複する場合は事前の協議が必要である。）
・建築基準法		建物復元の際は、 ・接道義務の確認 ・都市計画区域内で市街化調整区域として指定があり、一般の建物と違い諸条件が定められている。（開発景観課の許可） ・建物の規模によるが、面積等により消防法の関連がある。
・都市計画法第29条 （市街化調整区域の開発許可） ・都市計画法第43条 （市街化調整区域の建築許可） ・熊本市都市景観条例第18条 （大規模建築物等届出） ・都市計画法第58条（風致地区）	※平成19年11月末に法律がかわったため、それ以後の建築物については協議が必要である。 ※地方公共団体のため届出不要である。 ・土地の形質変更、建築物の建築、木材の伐採その他について、県・市がおこなう場合は、風致地区の決定権者と事前の協議を要する。	「千金甲風致地区」
・都市公園法		西平山公園を活用（便益施設、駐車場等）するのであれば事前の協議が必要である。
		百塚、烏帽子、前原、平居屋敷地区は、公共下水道全体計画区域外である。
・土砂災害防止法	土砂災害防止法の警戒区域指定が予想されるため、整備について県との協議が必要である。また、開発行為に該当する場合は都市計画法第29条に関わらず、県との河川協議が必要である。	
	整備に伴い市道の用途廃止、付け替え等行なうことがあれば申請が必要である。（熊本市道及び法定外公共物用途廃止、付け替え、払い下げに関する事務取扱要綱）法定外公共物（里道、水路）についても上記と同様である。	
	該当地の地目が農地であれば必要である。	指定地の地目は山林であるため、転用の手続き等は不要である。
・森林法第34条第２項　（金子塔） 国有林地（土砂流出防備保安林）	許可申請が必要である。	熊本県保安林（保安施設地区）内作業許可実施要項による。
・熊本県立自然公園条例	通知が必要（整備事業） ・建築物：高さ13m以上、または1,000㎡以上の場合 ・土地の形状変更：高さ５m以上の切土・盛土、または200㎡以上の場合 ・案内板などを設置する場合	（調査のための発掘） 金峰山県立自然公園区域の普通地域に該当する。普通地域においては、文化財保護法第92条第１項に規定する調査は届出・通知を必要としない。

かかる関係法令一覧



第11図　池辺寺跡周辺の法規制

② 縄文時代

この地域では、縄文時代の遺物が出土する箇所は多い。高橋町遺跡群内の上高橋高田遺跡では、市営団地・中学校体育館建設に伴い発掘調査が行われたが、縄文時代後期・晩期の遺物も数多く出土している。遺構は、晩期（黒川式期）の貯蔵穴が検出されている。同じ高橋町遺跡群内の高橋貝塚からは、人骨の出土が伝えられている。他に、川戸貝塚（松尾町）、野添平遺跡（谷尾崎町）、千原台遺跡・島崎遺跡（島崎町）など遺跡は多く、野添平遺跡・千原台遺跡・島崎遺跡では発掘調査が実施されている。野添平遺跡では、早期の炉穴・集石遺構などがみつかっている。千原台遺跡では後期の土器・石器が出土している。島崎遺跡は後期・晩期を主体とする遺跡で、埋設土器や炉穴などが検出されている。池辺寺跡百塚地区においても縄文時代早期・晩期の土器・石器が出土する。

③ 弥生時代

弥生時代の遺跡はさらに多い。前期には、上高橋高田遺跡や御坊山遺跡（小島上町）のように低地に接した微高地に立地するが、中期になるとより高い丘陵地に甕棺墓の形成が広がる。中期の集落遺跡は、上高橋高田遺跡で大規模な集落が把握されており、遺物も質・量ともに豊富である。後期では、戸坂遺跡が著名である。これまでに3面の青銅鏡が出土しており、発掘調査も実施されている。他に、野添平遺跡、石神原遺跡・千原台遺跡（島崎町）でも発掘調査が実施され、後期の住居群が検出されている。池の上遺跡（池辺寺跡池の上地区、後期池辺寺跡）でも土器・石器などが出土している。

④ 古墳時代

古墳に関しては、熊本市内で最も密集した区域といえる。平野に近い丘陵・山麓において、多くの古墳・石棺墓が群集している。本妙寺山（石棺群）・花岡山（石棺群，北岡古墳，北岡横穴群）・万日山（万日山古墳）・城山（城山古墳群）・小松山（小松山古墳群，二軒小屋古墳，堂の園古墳，堂園遺跡）・高坊山（高坊古墳）・高橋山（二本松古墳群）・高城山（高城山古墳群）・楢崎山（楢崎山古墳群）・権現山（千金甲古墳群，権現平古墳群）などがある。現存しない古墳も多い。千金甲1・3号墳は、装飾古墳として特に著名で、国史跡に指定されている。万日山古墳は、7世紀前半の古墳である。集落遺跡としては、上高橋高田遺跡が知られ、遺構・遺物ともに豊富で、鏡・刀飾りなどが注目されている。千原台遺跡では、発掘調査で前期の住居群が検出されている。池の上遺跡でも、6世紀後半代と思われる竪穴住居や管玉などが出土している。また、池辺寺跡烏帽子地区でも古墳時代中期の土器が出土している。

⑤ 古代・中世

上高橋高田遺跡では、縄文時代から鎌倉時代までほとんど途切れなく遺物が存在する。それでも、7世紀～8世紀前半や10・11世紀代のものはあまり多くはなく、8世紀後半から9世紀中頃、12世紀後半から13世紀前半に主体がある。池の上遺跡でも同様で、土坑・柱穴と多量の古代・中世の遺物が出土しており、上高橋高田遺跡と一連の遺跡とも考えられる。他に戸坂遺跡と二本木遺跡群において古代・中世遺跡の発掘調査例がある。二本木遺跡群は、古代・中世の「飽田国府」推定地とされ、近年熊本市教育委員会・熊本県教育委員会によって集中的に発掘調査が行われている。特に、第13次調査区からは国府あるいは飽田郡衙に関連すると思われる大規模建物群（8世紀後半期）が検出され、注目されている。二本木遺跡群は、古代・中世においては熊本県（肥後）の政治・経済ともに中心地であり、遺構・遺物の量・質ともに他の遺跡を大きく凌駕している。他に、高橋南貝塚においても発掘調査が実施され、13世紀代を主体とした遺物が多く出土している。この地域の中世城址では、上代城・上松尾城・下松尾城・楢崎城・池上城が知られているが、発掘調査事例はない。

⑥ 近世

近世においては、この地域は城下町には含まれていない。池田手永に属していた。二本木遺跡群では、遺跡の上位に近世・近代の遺構・遺物が確認されている。高橋町は坪井川河口の町として繁栄したこと

がわかっているが、遺跡として認識できてはいない。

(2) 池辺寺跡に関連する周辺の文化財、名所・旧跡など

① 神社・祠

池上神社（池上町北小路）：日吉神社ともいう。祭神は大山咋神。元来は、独鈷山にあった山王社で、明治 4 年（1872)、池辺寺廃絶後に字山王平から移され、二王堂と呼ばれる区域に跡地がある。

石崎八幡宮（池上町北小路）：正保 4 年（1647）に現池上神社の東側に勧進されたが、昭和12年頃に池上神社に合祀された。東に立つ鳥居は石崎八幡のものである。

八王寺大権現（池上町神傳）：独鈷山の東中腹にある。山王七社の一つ。祭神は国狭槌尊。

独鈷山山頂の祠（池上町高野峰）：独鈷山山頂にある石の祠。江戸末期のものと想定。御神体は自然石 2 個。付近に経塚があったといわれている。

高橋東神社（上高橋町高田）：旧名は天社大明神社。祭神は道君首名。和銅 3 年(710)の創建と伝えられる。境内に樹齢約1000年のクスノキ（市指定天然記念物)。

高橋西神社（上高橋町堂園）：旧名は若宮大明神社。祭神は阿蘇十二神。応徳 2 年（1085）創建。

② 寺院・堂

聖徳寺（上高橋町居屋敷）：高橋山聖徳寺。天台宗比叡山正覚院の末寺。応徳 2 年（1085）の創建と伝えられる。本尊は不動明王。雷神堂あり。礼盤の裏書きに「元池上村池邊寺ノ寶物ニ有之候…」の墨書。

妙林堂（上高橋町烏帽子）：百塚の南側尾根の頂（烏帽子山の東峰）に、近世末頃かと思われる瓦が積まれた堂跡がある。石に「妙林堂」と刻んであるが、地元では「ミョウジンドウ」と呼ばれている。

薬師堂（池上町平居屋敷）：平集落の中心部に 2 体の薬師様を安置した堂がある。年代は不明。

③ その他

味生池（池上町泥上など）：「阿治宇池」とも記す。『続日本紀』によると、和銅年間に国司道君首名によって築かれた灌漑用溜池である。本妙寺の石碑には、加藤清正が埋め立てたと記されている。この池に住む龍を鎮めるために池辺寺が建てられたと伝えられている。

妙椙水（池上町神傳）：独鈷山の東中腹。八王寺大権現のそばにある小さな湧水池。日照りの時に池辺寺の独鈷をこの水に浸して修法すると、雨が降ると伝えられる。

兜率石（池上町独鈷山・高野峰）：独鈷山の山頂にある大岩。龍が昇天した岩と伝えられている。南東側にやや下った所の大岩をいう人もいる。

(3) 石造物・仏像・寺宝など

① 石造物（年代順）

石薬師像 4 体（城山上代町高野邊田）：元応元年（1319）・正中 2 年（1325）・文化 4 年（1807） 2 体

笠塔婆「金子塔」（池上町西平山）：建武 4 年（1337）　市指定有形文化財

宝篋印塔台座（池上町北小路＝池の上地区）：応永 3 年（1396）　市指定有形文化財

一字一石碑（池上町北小路＝池の上地区）：嘉吉 2 年（1442）　市指定有形文化財

板碑（池上町北小路＝池の上地区）：室町時代後期と推定　市指定有形文化財

板碑（池上町神傳＝二王堂地区）：永正11年（1514）

板碑（城山上代町高野邊田）：享禄 3 年（1530）

板碑（池上町来迎院）：永禄 3 年（1560）

板碑（池上町向田＝金光寺地区）：永禄10年（1567）

石灯籠竿石（池上町北小路＝池の上地区）：寛永16年（1639）　市指定有形文化財
一字一石経塚（池上町前原）：享保３年（1718）
住職墓碑（池上町北小路＝池の上地区）：享保14年（1729）
放牛地蔵（池上町北小路＝池の上地区）：享保16年（1731）
住職墓碑（池上町北小路＝池の上地区）：元文４年（1739）
住職墓碑（池上町北小路＝池の上地区）：安永２年（1773）
板碑「ワクド石」（池上町日影）：天明～寛政頃
池辺寺再興碑（池上町北小路＝池の上地区）：天明３年（1783）　市指定有形文化財
石碑「十三姫塚」（五輪塔群）（池上町来迎院）：天保２年（1831）
住職墓碑（池上町北小路＝池の上地区）：天保10年（1839）
住職墓碑（池上町北小路＝池の上地区）：明治７年（1874）
五輪塔多数（池上町北小路・煤窪・来迎院・平居屋敷）
他に、現存しないが池の上地区に六地蔵石幢があったと伝えられている。

②　仏像

浮木観音像（池辺寺本尊と伝えられる）	池の上公民館蔵	市指定有形文化財
不動明王（護摩堂の本尊）	池の上公民館蔵	市指定有形文化財
金子観音（胎内仏。金子拾得と伝えられる）	池の上公民館蔵	市指定有形文化財
愛宕地蔵	池の上公民館蔵	市指定有形文化財
勝軍地蔵	池の上公民館蔵	市指定有形文化財
僧形男女神像（３体）	池の上公民館蔵	市指定有形文化財
胎内仏（馬場上地区採集）	個人蔵	
胎内仏（来迎院地区採集）	個人蔵	

③　寺宝など

五鈷鈴（平安時代後期）	県立美術館蔵	県指定有形文化財
独鈷杵（鎌倉時代）	県立美術館蔵	県指定有形文化財
龍の鱗　３枚	県立美術館蔵	市指定有形文化財
経盤（銅製。「寛政元年、秀晃」銘）	県立美術館蔵	市指定有形文化財
千手観音画像（紙本墨書）	県立美術館蔵	市指定有形文化財
松尾焼陶器（花瓶２・香炉２。「天明３年、秀晃」銘）	県立美術館蔵	市指定有形文化財
縁起絵巻（文化元年）	県立美術館蔵	市指定有形文化財
古文書（16世紀代のもの７通）	県立美術館蔵	市指定有形文化財
瓦（鬼瓦：天明４年、文化５年・12年、池辺寺銘など）	池の上公民館蔵	
礼盤（池辺寺のもの記載）	上高橋町聖徳寺蔵	

他に、建築材・「愛宕山」銘額などが池の上公民館に所蔵されている。

Ⅱ 池辺寺跡の調査成果

1 遺構

(1) 百塚地区Ｃ地点

百塚地区は、熊本市池上町大字平の集落地からさらに奥に入った谷間の斜面に位置し、字西平山に所在する。百塚地名は、古くは『国郡一統志』（1669）に「聖観音像が拾得された寺の由来地」として記載され、『肥後名勝略記』（1689）以降の地誌や縁起には「妙観山に観音の殿址があり、その側に百塚という所があって金子塔が立っている」と記されている。

昭和42年度の踏査では土器・瓦が採集され、「百塚Ａ遺跡（地点）」「百塚Ｂ遺跡（地点）」と名づけられた。昭和61年度、Ａ地点西側に接する私道の西側雑木林をＣ地点として確認調査に着手した。

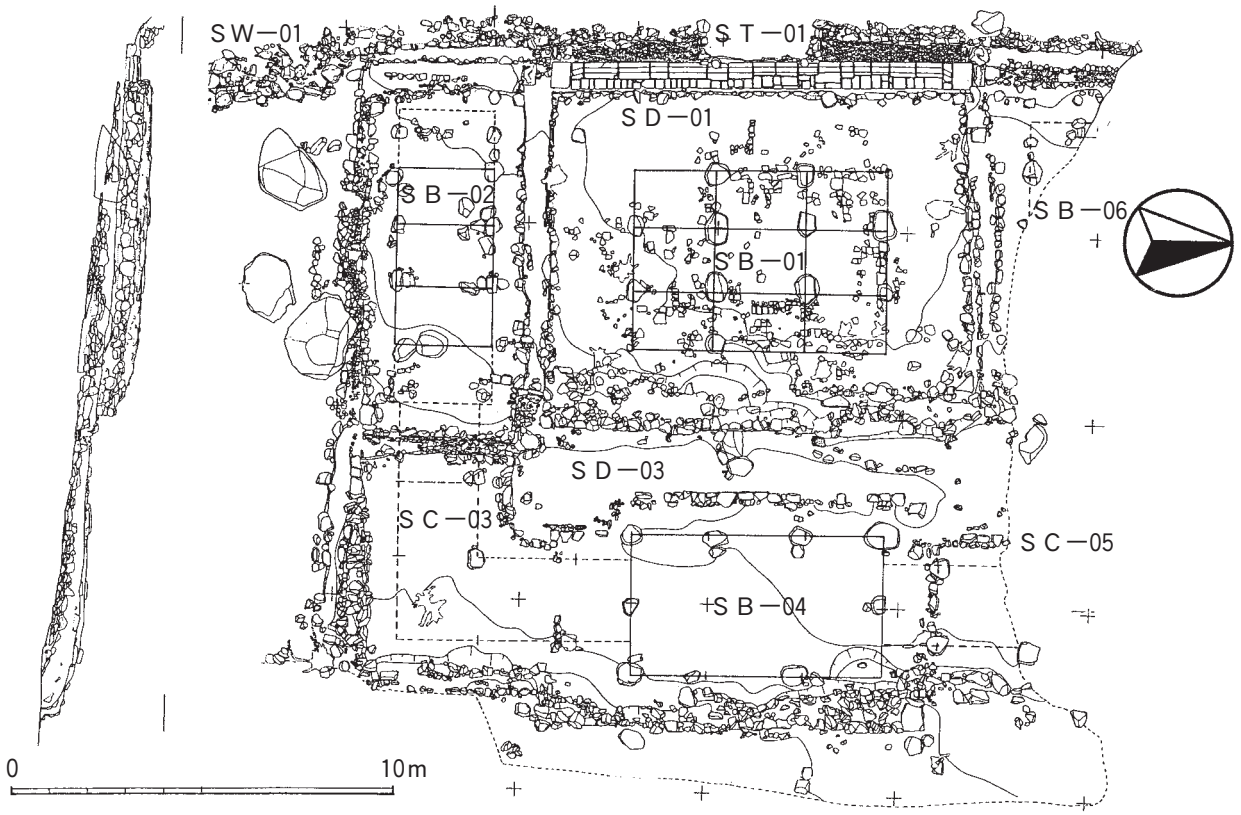
昭和61～63年度調査では、礎石建物６棟（ＳＢ・ＳＣ―01～06）が検出されている。中央奥に本堂と思われる中心建物（ＳＢ―01）を構え、回廊様に５棟の建物が囲む。中心建物には塼が敷かれている。各建物の軒下には雨落溝・排水溝（ＳＤ―01～11）が伴い、多くの瓦・土器が出土している。土器は９世紀中葉～後葉のものと思われ、建物群が廃棄された時期を示している。

建物群の背後には高さ１ｍ程の石垣（ＳＷ―01）が築かれ、広い斜面域と区画している。石垣には２か所に階段が残っているが、本来は３か所であったと思われる。１つは中心建物（ＳＢ―01）の背後にあり（ＳＴ―01）、建物と階段の間にはＳＤ―01、階段の両脇には玉砂利を敷き詰めた空間と精巧なつくりの雨受け石が設置されている。この建物群の中で最も精緻なつくりであり、重要な部分であったと認識される。他に、建物に付随する小規模な階段が２か所で検出されている。

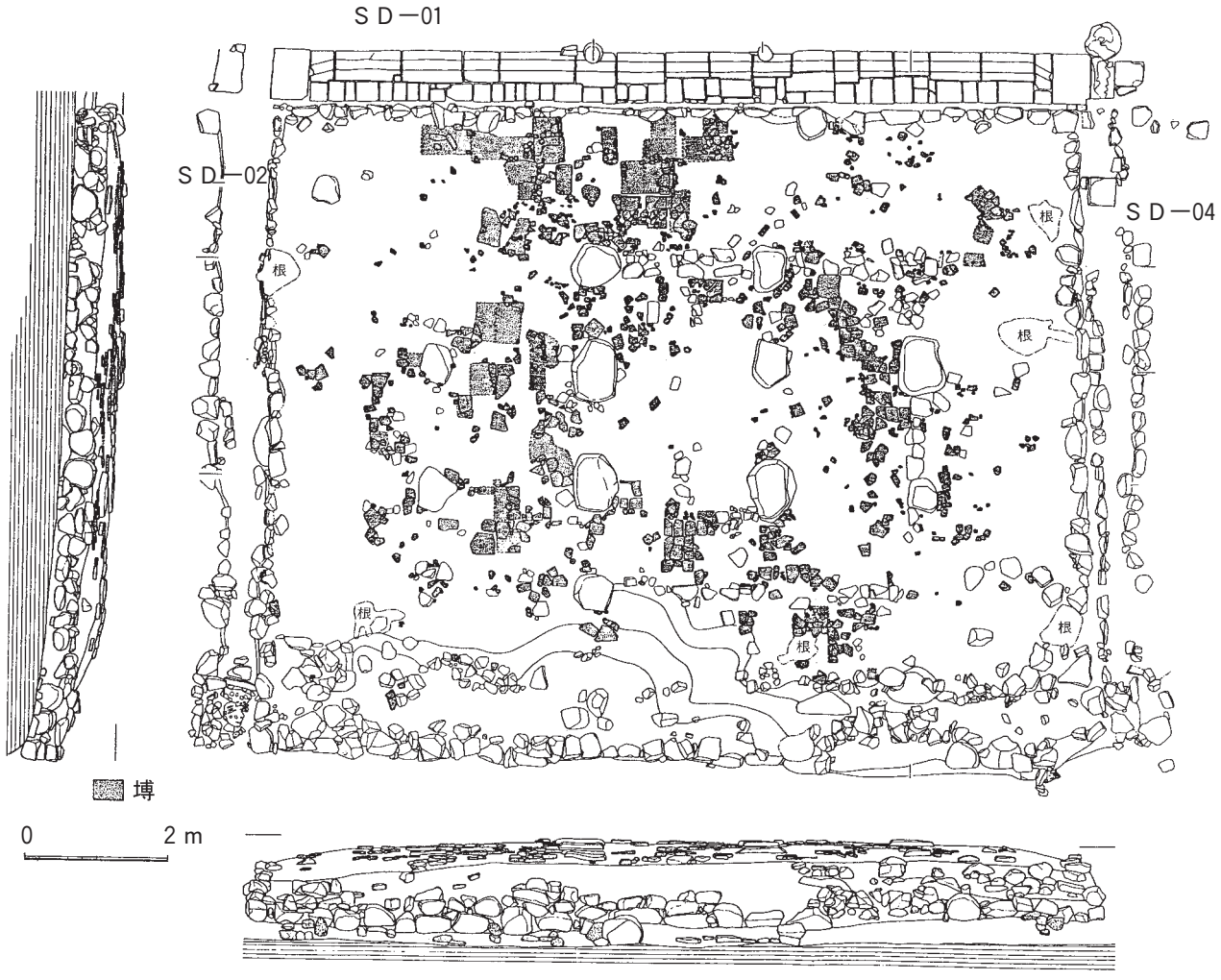
昭和63年度から（本格的には平成２年度から）は、建物背後西側の斜面域の調査をおこなった。雑木を伐採し薄い表土を除去すると、おびただしい量の石が検出された。不要と思われる石を除去すると、一辺2.4mの方形石積み（ＳＳ―01～100）が確認された。10列×10列の100基が配置されており、それらを囲むように石塁（ＳＷ―02～04）が巡っている。石塁で囲った石塔群の範囲は東西約55m×南北約60m四方の約3300㎡で、傾斜は約12度である。１基のみではあるが、内部精査をおこなったところ、内部に掘り込みや埋納はなかった。崩壊した多量の石とともに石製の塔部品（宝珠・層輪など）が出土していることから、石積みは塔を表現したものと判断される。石塁の脇や石積みの手前に土師器坏（灯明皿）の出土が多く、建物周囲で出土する土器と同じ時期のものである。まさに金子塔碑文にある「百塔」と判断されるが、碑文が示す焼失年代と出土土器の時期感とは約百年の差がある。また、建物・石塔域ともに火災の痕跡は認められない。

平成８年度には南側尾根部にて調査を実施した。百塔を囲む石塁と平行して、さらに南外側に石塁（ＳＷ―06）が築かれている。直交する石塁（ＳＷ―07）や２基の方形石積みも検出されている。出土遺物から建物・石塔群と同時期と判断され、南側尾根も区画して施設利用がなされていたことがわかった。

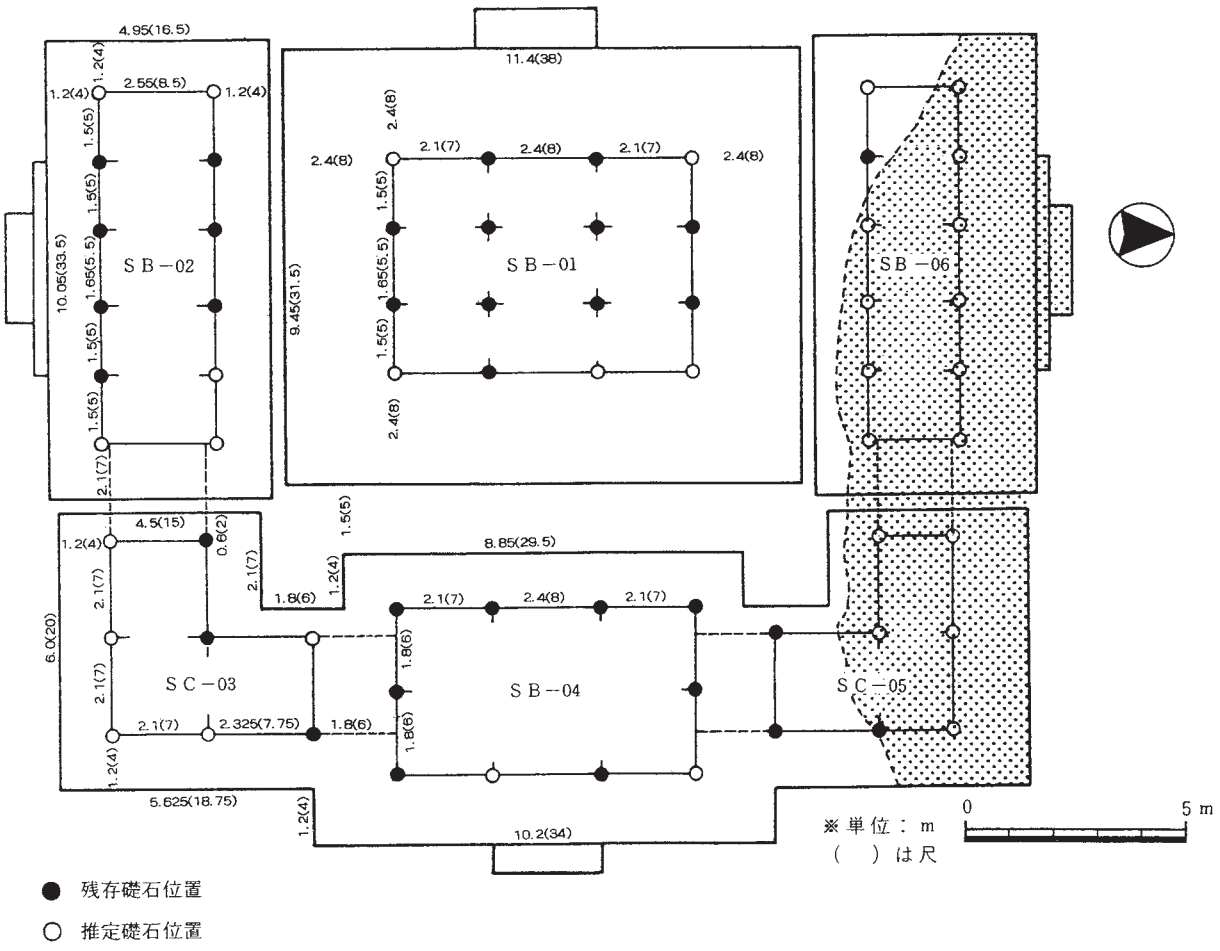
平成12～13年度は建物群の南側平坦地を調査区とした。調査区の東側から１基、石塔にのぼる階段（ＳＴ―02）の南側に３基の方形石積みが検出されている。また、ＳＢ―02の南側に小規模な階段（ＳＴ―03）があるが、その南側から浅い土坑（ＳＫ―02）が検出された。この区域には大きな岩が３個露出し、中央の岩は地表面まで平たく割ってある。西側の岩の根元には焼土が検出され、土坑内には煤のついた土師器甕が廃棄されていた。この部分がおそらく出入り口で、出入り口の脇で火を焚いていたことが想定される。ＳＴ―02の正面東側は若干の高まりがあり、遺構は検出されていない。通路部分であろう。百塚Ａ地点ＳＸ―01への導水遺構は検出されなかったが、ＳＸ―01西側の部分は谷状に窪んで、基壇建物群などの雨水はＳＸ―01に向かって流れることがわかった。調査区南側からは谷部が検出されている。この谷からＳＸ―01に導水したと思われる。



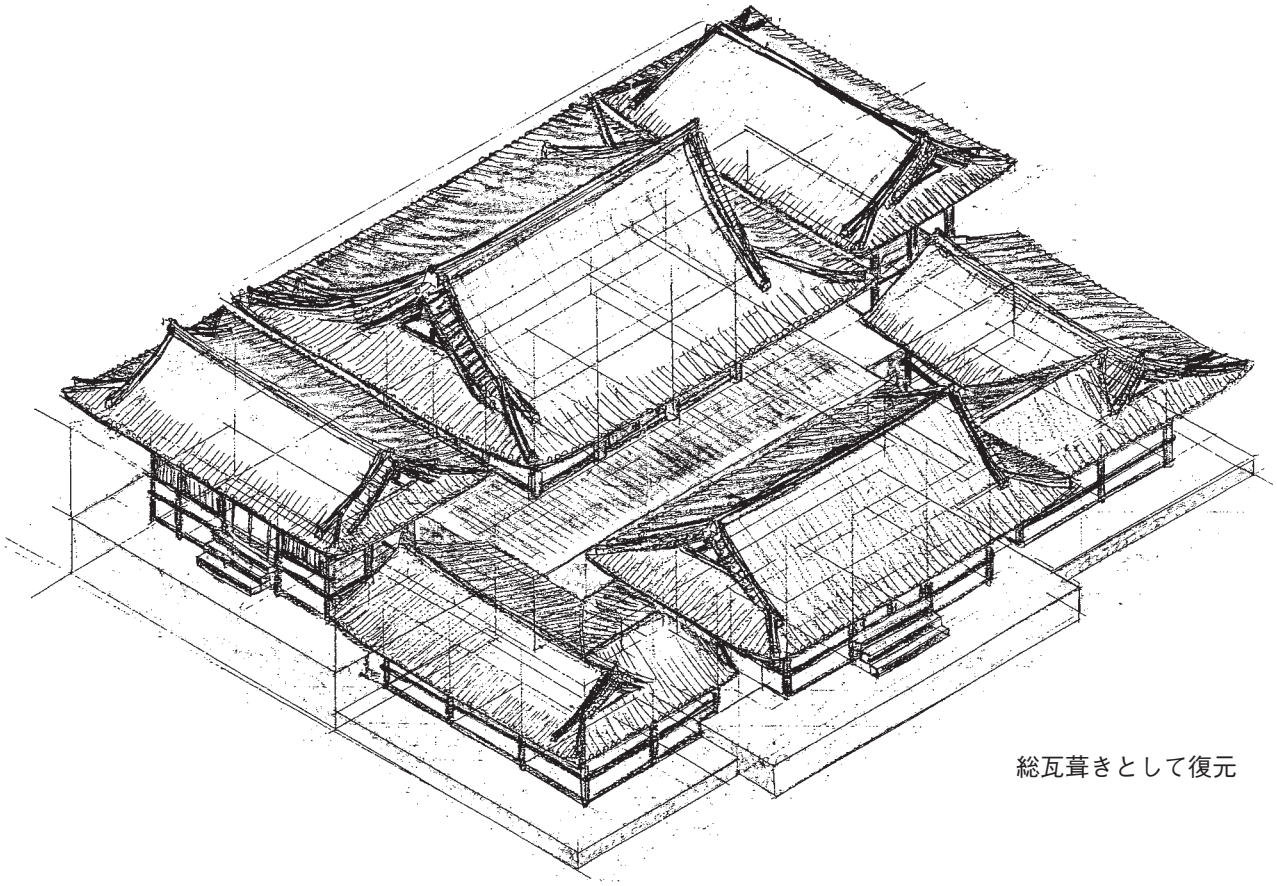
第12図：百塚地区Ｃ地点礎石建物・溝配置図



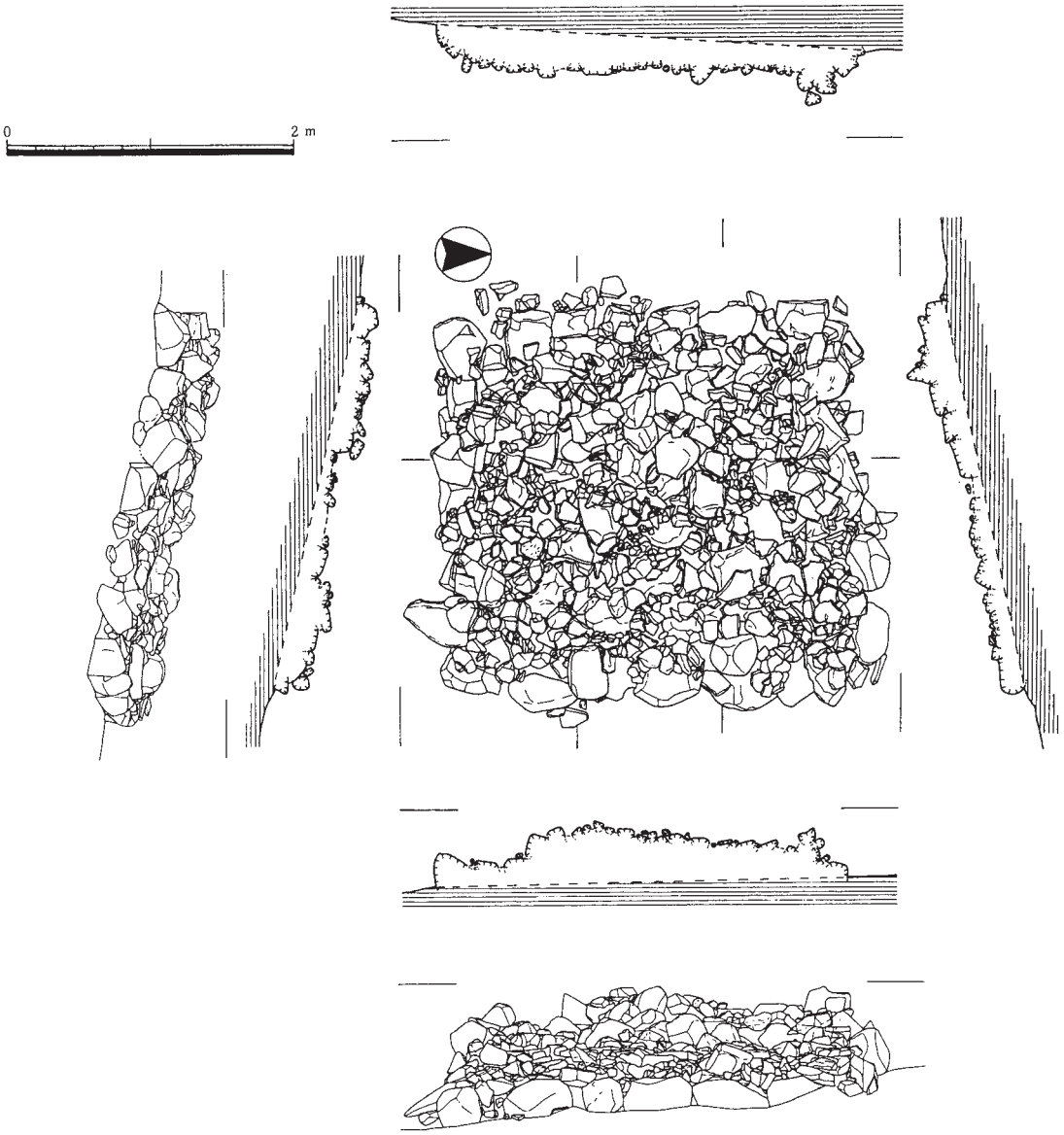
第13図：百塚地区Ｃ地点　ＳＢ－01平面・立面図



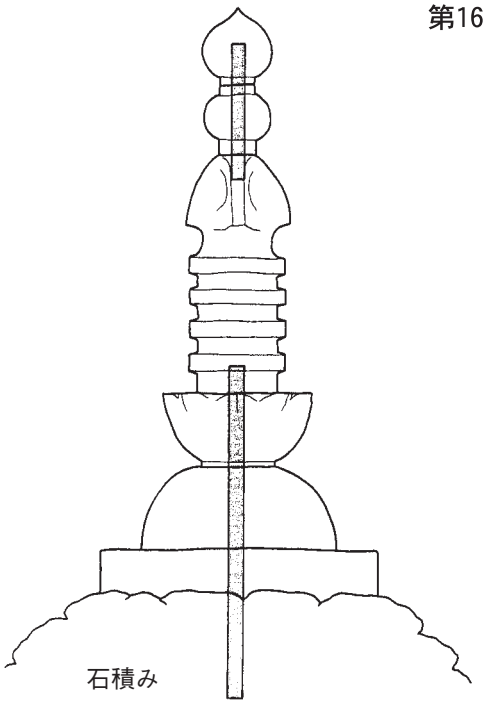
第14図：百塚地区Ｃ地点礎石建物模式図



第15図：百塚地区Ｃ地点礎石建物群復元図（作成：澤村　仁）



第16図：百塚地区Ｃ地点石塔（ＳＳ－011）実測図



第17図：石塔上部復元図

(2) 百塚地区Ａ地点

百塚地区Ａ地点はＣ地点東側のミカン畑で、昭和42年度には一筆分（約3500㎡）のみを指していた。その畑は平成10・11年度に発掘調査を実施し、平成13年度に追加指定を受けている。昭和42年当時はその東側が雑木林になっており、さらに東側ミカン畑がＢ地点と呼称された。現在はＡ・Ｂ地点の間の雑木林もミカン畑に開墾され、平成14年度に確認調査をおこないＡ地点に含めた。また、Ａ地点指定地の南側のミカン畑でも平成13年度に確認調査をおこない、ここもＡ地点とした。Ａ地点全域が段々のミカン畑に造成されており、旧地形を残す区域はない。

平成９年度にＡ地点にて小規模なトレンチ調査をおこない、平成10・11年度に発掘調査を実施した。造成は昭和20年代よりおこなわれたが、重機を使用していないため遺跡の残りは良好であった。造成時の土器・瓦の出土が知られ、鬼瓦や礎石の存在によって池辺寺堂宇の存在地と想定されていた。平成10年度、上位畑の南側からは庭園遺構（ＳＸ―01：池跡）が検出された。縁は石列・石積みによって護岸され、中島は砂利敷きだったと思われる。池底には多くの土器・瓦の他に、鍛冶工房で不要になった鉄滓（てつさい）なども投棄され、Ｃ地点建物群と同様９世紀後葉期に廃棄されたようである。Ｃ地点建物の正面（池の北側）には参道域と思われる空間地・石列（ＳＬ―01）があり、その北側に溝（ＳＤ―01）・鍛冶工房（SX―02）が検出された。鍛冶工房からの遺物は９世紀後半（中葉～後葉）のもので、建物の補修に伴う工房と思われる。鍛冶工房を取り囲むような溝は、上～中位からは鉄滓やフイゴ羽口が出土しているが、下位からは９世紀前葉期（ＳＫ―03より新しい）の土器のみで、土師器坏が60枚重なった箇所がある。それらの中には墨書で「友（祓？）」と書かれており、祭祀遺構と思われる。整地層下にあった土坑（ＳＫ―03）からは、９世紀前葉（堂床と同時期）の土器が出土しており、Ａ地点の造営期を示すと考えられる。上位畑面からは、他に土坑や石垣が検出されている。

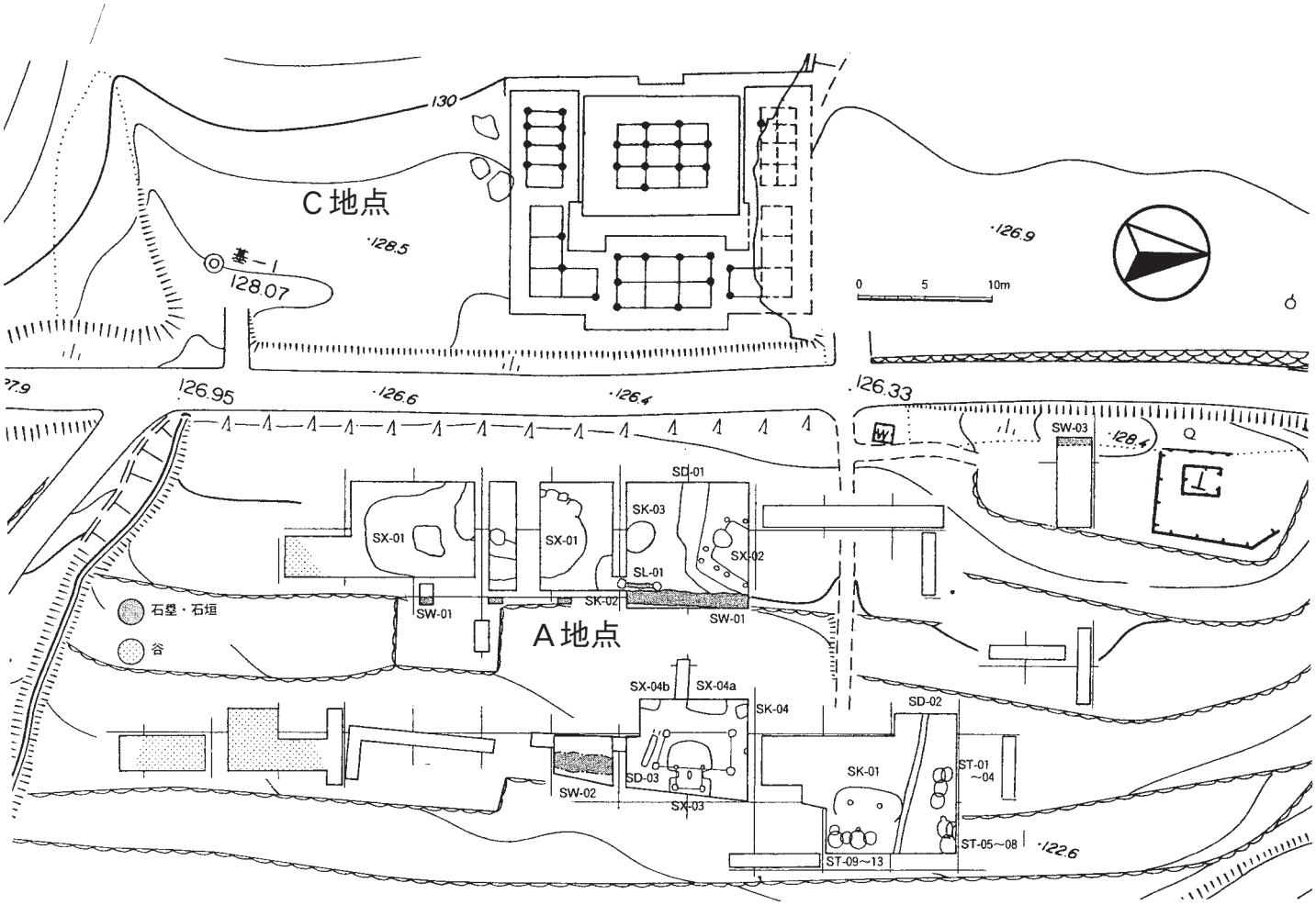
平成11年度は、中段の畑を主体に調査をおこなった。参道域の延長（若干北にそれる）にて出入り口と思われる遺構（ＳＸ―03）が検出されたが、門跡と断定することはできなかった。傾斜の変化点に位置し、その南側には石塁（ＳＷ―02）が残る。北側の傾斜変化点の下側からは、竪穴状の土坑（ＳＫ―01）が検出された。硬化した床から９世紀前葉～後葉の土器が多く出土している。その東・北側には土坑墓群（ＳＴ―01～13）がある。３群13基が検出され、９世紀前葉から後葉のものと思われる。１基（ＳＴ―06）のみ火葬墓の可能性がある。ＳＷ―03は最も高い位置にあり、Ｃ地点との区画の石塁であろうか。平成10・11年度調査区は、平成13年度に追加指定を受けている。

平成13年度の調査区は、平成10・11年度調査区の南側で小さな谷をはさんでいる。Ｃ地点南側尾根・谷の東延長に位置する。小規模なトレンチ調査で、遺構は検出されなかったが谷堆積土には遺物が多く含まれている。重機にて開墾された畑であるが、遺構が存在する可能性もある。

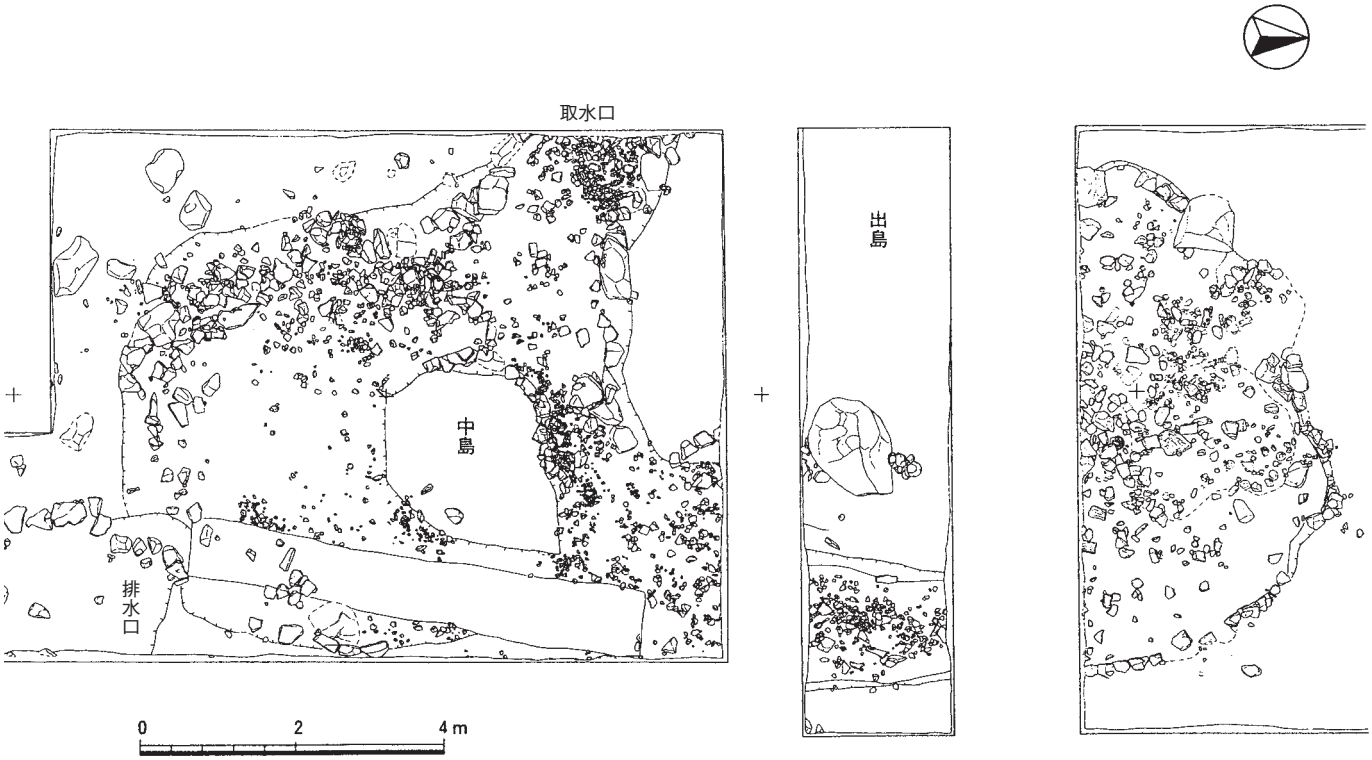
平成14年度の調査区は、平成11年度調査区の東隣のミカン畑である。従来のＡ地点・Ｂ地点の間だが、調査成果からＡ地点に含めた。小規模なトレンチ調査である。南側は谷地であるが高い部分では遺物包含層・遺構とも残存し、土坑などが検出されている。中央部分に若干硬化している面があったが、参道となる道路跡かどうかはわからない。平成13・14年度調査区は、現在もミカン畑（私有地）である。トレンチは底に山砂を薄く敷き、土で埋め戻している。

(3) 百塚地区Ｂ地点

百塚地区Ｂ地点は、Ａ地点東側の雑木林（現ミカン畑）とさらに東側にある雑木林・墓地にはさまれたミカン畑（一筆分）のみを指していた。Ｂ地点ミカン畑は人力によって２～３段に造成されており、平成14年度に小規模なトレンチ調査、16年度には中央部分の発掘調査を実施した。Ｂ地点の東側の墓地は古く、17世紀（元禄年間）から昭和までの土葬墓群である。墓地の東側に里道（小字境）があり、より東側は傾



第18図：百塚地区Ａ地点遺構配置図



第19図：百塚地区Ａ地点ＳＸ－01平面図

斜が急になって川に至る。川は北西から南東へ流れている。

平成14年度のトレンチ調査では、遺構は溝１本と硬化面の疑いのある箇所を見つけただけであった。耕作土から石製の帯飾り（巡方）が出土した。平成16年度の発掘調査は、中央の高まった区域を調査区とした。遺物包含層が部分的に残存し、大型の土坑や柱穴が多数検出された。遺構は一部しか掘り下げていない。土坑の性格はわからないが、９世紀代のものである。岩に囲まれた部分から銅製品鋳造炉の一部と思われるものも検出され、耕作土からは六器などの法具類鋳型が多く出土した。一帯の耕作土には大量の遺物が含まれている。Ｃ地点中軸線延長域では、参道硬化土の検出を期待したが認められなかった。参道の有無については、まだ結論は出せない。

（4） 烏帽子地区

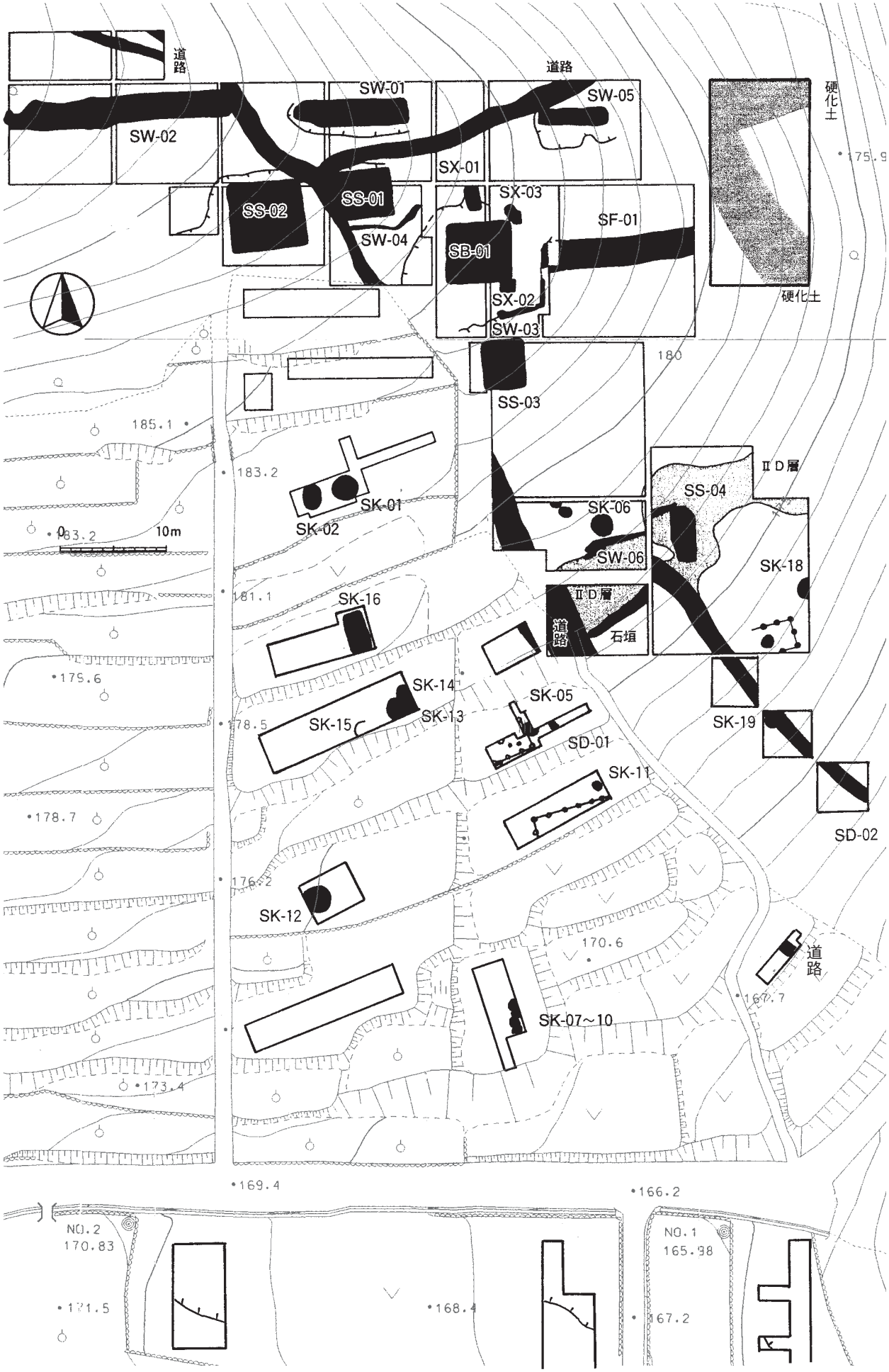
百塚地区の西背後は百塚より100mほど高い山（赤羽毛山）があり、その尾根筋が南東方向と北西方向に延びている。北西尾根は若干下がった後にさらに高い頂へと続いており、繰り返しながら主峰の金峰山にいたる。南東尾根は、幅の狭い緩やかな尾根が200～300m延び、その先は急傾斜で谷に落ちていく。南東尾根とその南側斜面の一帯を「烏帽子地区」と呼んでいる。谷底の中心を東西方向に延びる直線道路は、池上町字西平山と上高橋町字烏帽子の境となる里道で、この道の両側斜面をミカン畑に開墾した一帯を地元では「烏帽子開墾地」と呼ぶため、池上町側も烏帽子地区とした。

平成９年度に烏帽子地区の踏査をおこない、上位畑を主として多くの土器片が落ちていたため、３か所でトレンチ調査を実施した。うち上位の畑（尾根から５mほど下）から大量の土器を含む土坑が２基（ＳＫ―01・02）検出された。耕作土にも大量の土器片が含まれている。土器はほとんどが灯明皿に使用した土師器坏で、他に椀や須恵器坏などがある。９世紀中頃のものと思われ、祭祀に用いた土器を廃棄したと解釈している。このトレンチからは土坑４基が検出されている。中段のトレンチは、ステップ状に平坦地が広がる畑に設定した。小規模な掘立柱建物が１棟検出され、これも９世紀代のものと思われる。他に土坑１基、溝１本も検出されている。

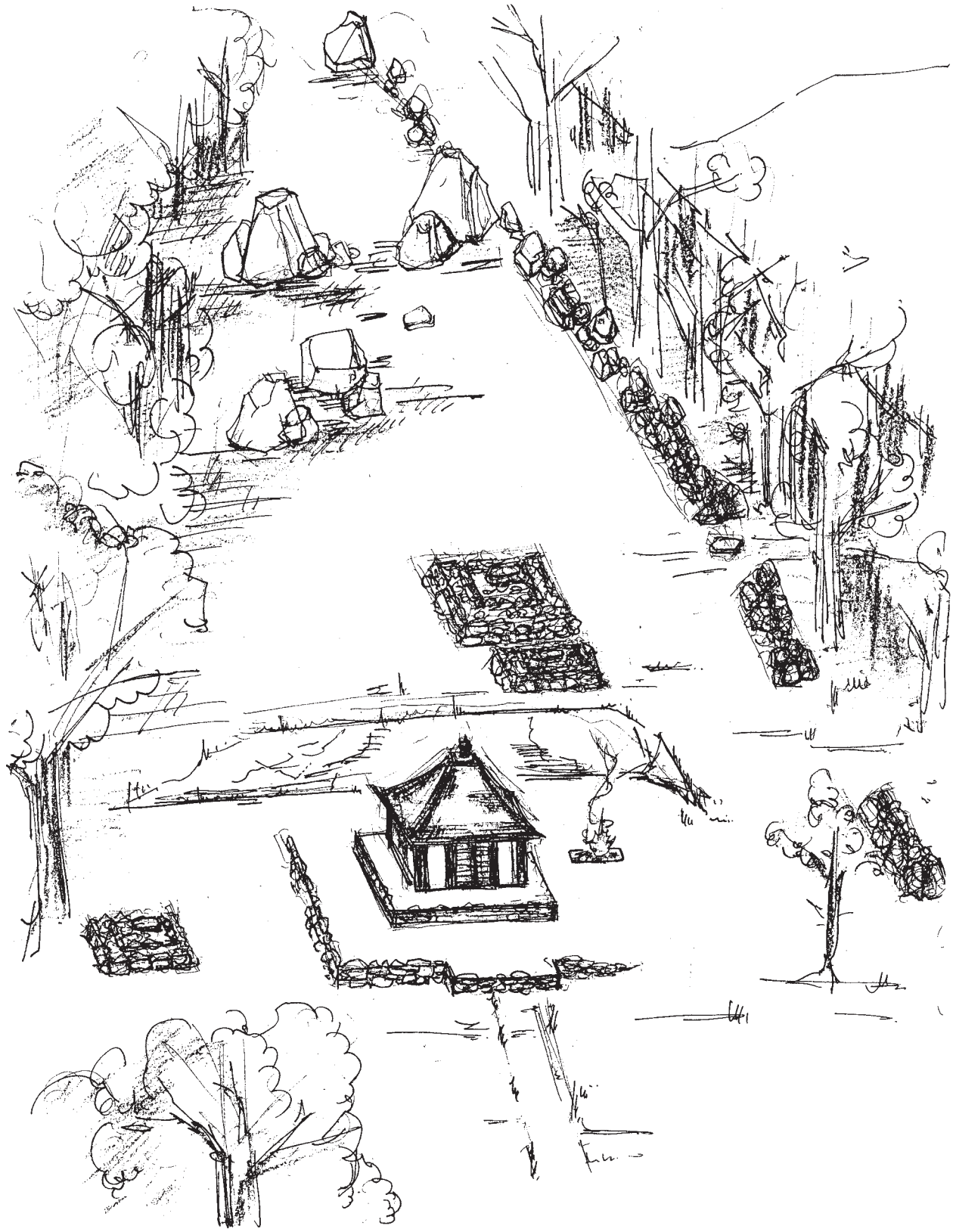
平成９年度調査時に尾根筋の踏査もおこない、遺跡の存在が予想されていた。土坑群の北側に位置する標高185mあたりは造成したかのように平坦で、岩・石はほとんど見られない。その背後（西側）は急に一段高くなり、また傾斜が緩やかになる。そこには１m弱の岩と、割った石が多く見られ、一段下の平坦地とは景観が異なる。岩と石は規則性があるように見え、尾根筋に並ぶ岩、方形に集められた石が枯葉の下に遺跡が埋もれていることを示唆していた。標高191mあたりからは１mを超えるような岩が多くなり、人為的に割られた石も見られない。ただし、大きな岩も一列に並ぶように見え、どのあたりからが遺跡なのかは一見してわからない。より西側ほど尾根幅はせまく、大きな岩が乱立している。人の行き来を拒むようなたたずまいで、神秘的で、かつ畏敬の感が迫ってくる。平成15年度から現在まで発掘調査を実施している。

平坦地からは、方形の建物基壇（ＳＢ―01）が検出された。本来は傾斜面で、西側と北側を大きく削り、南側は盛り土によって造成している。基壇は地山の削り出しによって形成され、縁には石が並んでいる。礎石・根石は残っていなかった。堂跡と思われる。基壇の北辺中央の縁から１m程離れた位置に、地山を長方形に掘り込み、火を焚いた跡がある（ＳＸ―01）。建物に伴うものと思われる。基壇の南東隅には小規模な掘り込みがあり、中に石が積んである（ＳＸ―02）。用途はわかっていない。対称となる基壇北東隅には、石を並べたような箇所がある（ＳＸ―03）。木根がかぶって、全体はわかっていない。基壇の南と東側から３m離れた位置からは、石垣（ＳＷ―03）が検出された。

基壇のある平坦地の上の尾根筋では、東西方向に石塁（ＳＷ―01）が延びている。長さ約12mで途切れ、約５m離れて西側延長にさらに石塁（ＳＷ―02）が延びている。東端から12m程の位置に３m程の岩があ



第20図：烏帽子地区遺構配置図



第21図：烏帽子地区復元想定図

り、その西側は人為的な配石か不明瞭になる。区画を示すと思われ、南側が内側になる。その北西から南東に下がる斜面に、北辺を揃えて東西２基の方形石積みが検出された。東側の石積み（ＳＳ―01）は５×６ｍの範囲に石が散っているが、本来は約3.8m四方・４段（東南からは4.5m・５段）と想定される。ＳＳ―01から西に約３ｍ離れて、約９ｍ四方の範囲に石が散っている（ＳＳ―02）。本来は5.5～６ｍ四方・５段（東南からは６～７ｍ・６段）と想定される。ともに中心には上面を割った石が据えてある。火を焚いた痕跡はない。祭壇と推定している。平成15年度調査で出土した土器は、いずれも９世紀中頃のものである。

平成16年度は、15年度調査区の東側と南側を調査区とした。ＳＷ―01の東側に約12m間をあけて、延長部分に長さ約７ｍの石塁が検出された。ＳＢ―01東正面で、ＳＷ―03の北端はステップ状にせり出した部分があり、小さめの石が集まっている。さらに東側は、幅約３ｍで若干硬化した高まりが東に延び、ＳＢ―01への通路と推定される（ＳＦ―01）。ＳＢ―01の南側斜面には、方形石積みが検出されている。約3.6m四方・３段（東南からは4.5m・４段）と想定される。中央の石はなかった。さらに南に下るとやや平坦な区域があり、土坑（ＳＫ―06）・石垣（ＳＷ―06）や焼土などが検出された。石垣の南外側からは、生活用具を主体とした９世紀代の土器が多量に出土している。少量ながら瓦も出土している。

平成17・18年度調査区は、さらに南・東側に拡張し、尾根の南側斜面である畑や谷底部においてもトレンチ調査をおこなった。斜面畑からは、土坑などの遺構が多く検出されている。南側拡張区からは、多量の遺物と溝・土坑・柱穴（掘立柱建物？）が検出されている。

（5） 金子塔（かなごのとう）地区

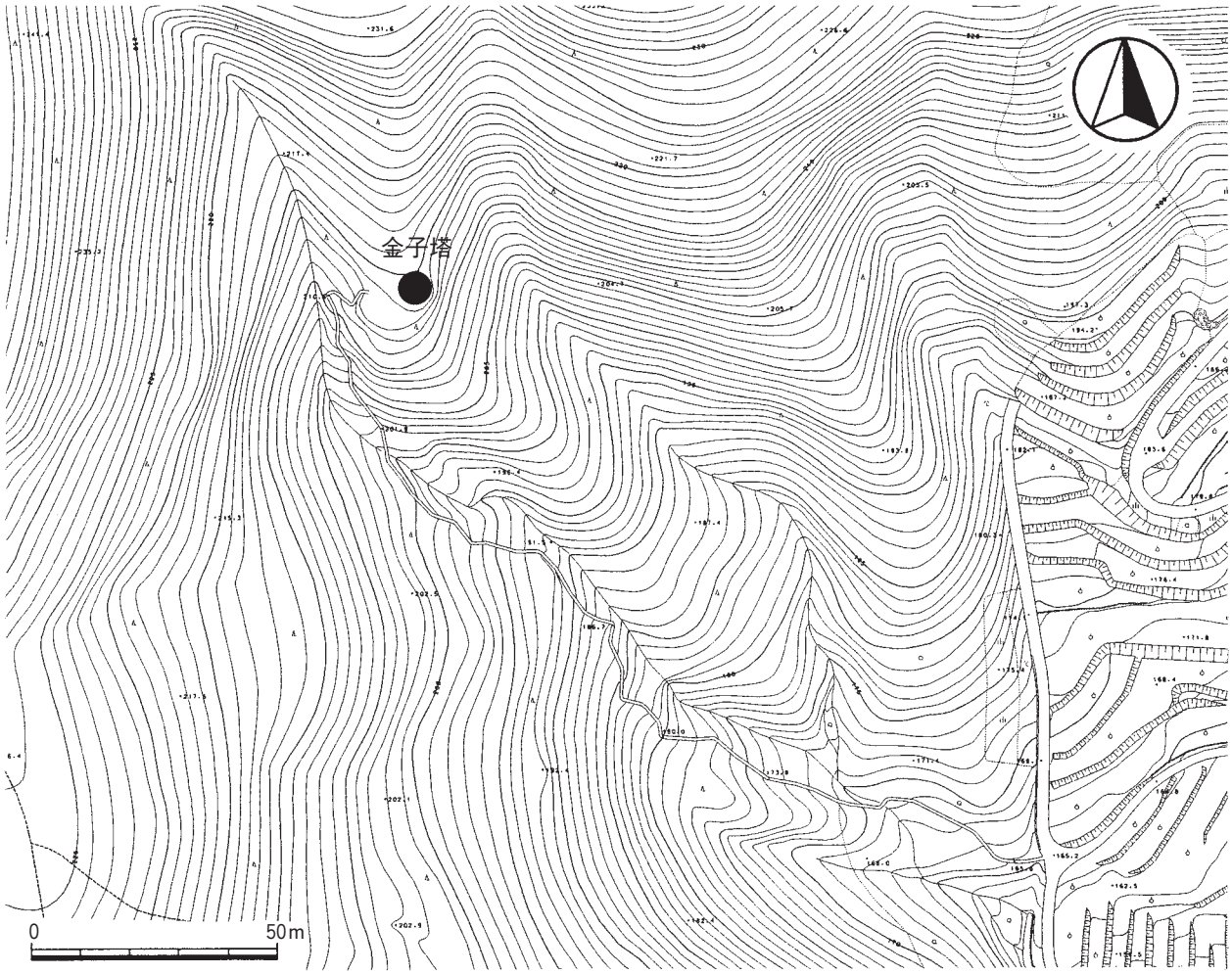
百塚地区の北側の山を西平山（にしたいらやま）と呼んでいる。山頂は赤羽毛山より約150m高い。西平山の南斜面が池上町字西平山で、百塚地区や金子塔も字西平山に含まれる。山の北東側は谷尾崎町、北・西側は松尾町である。北は金峰山の南斜面につながっている。この一帯のほとんどが国有林で、一部ミカン畑に開墾されている。近世の地誌では、金子塔の所在地も百塚と呼ばれていたようである。

金子塔は建武４年（1337）に建てられた高さ約２ｍの石製笠塔婆で、池辺寺の由来などが刻まれている。ミカン畑開墾地の西端から国有林地に約200m入った所にある。百塚地区の北端を流れる平川は、公園の下を通って西平山開墾地の南端を流れている。その平川は国有林地に入るとごく小さな沢になり、それに沿って山道ができている。金子塔はその沢沿いの山道を200m程進んだ右側の、小さな尾根状の平坦地に築かれている。標高は約214mで、百塚Ｃ地点建物群より90m程高い所にある。平成４年度に周辺の地形測量、塔の実測、拓本作業をおこなった。周辺の現況はスギ・ヒノキの林であるが、手入れがなされていないため台風によって倒木が重なり、雑木と混在した所も多い。偶然にも塔は立ったままであるが、いつ倒木が当たるかわからないため、伐採・覆屋設置などの保護措置が必要である。また、塔表面の風化が進行しているようで、文字が判読しづらくなっている。

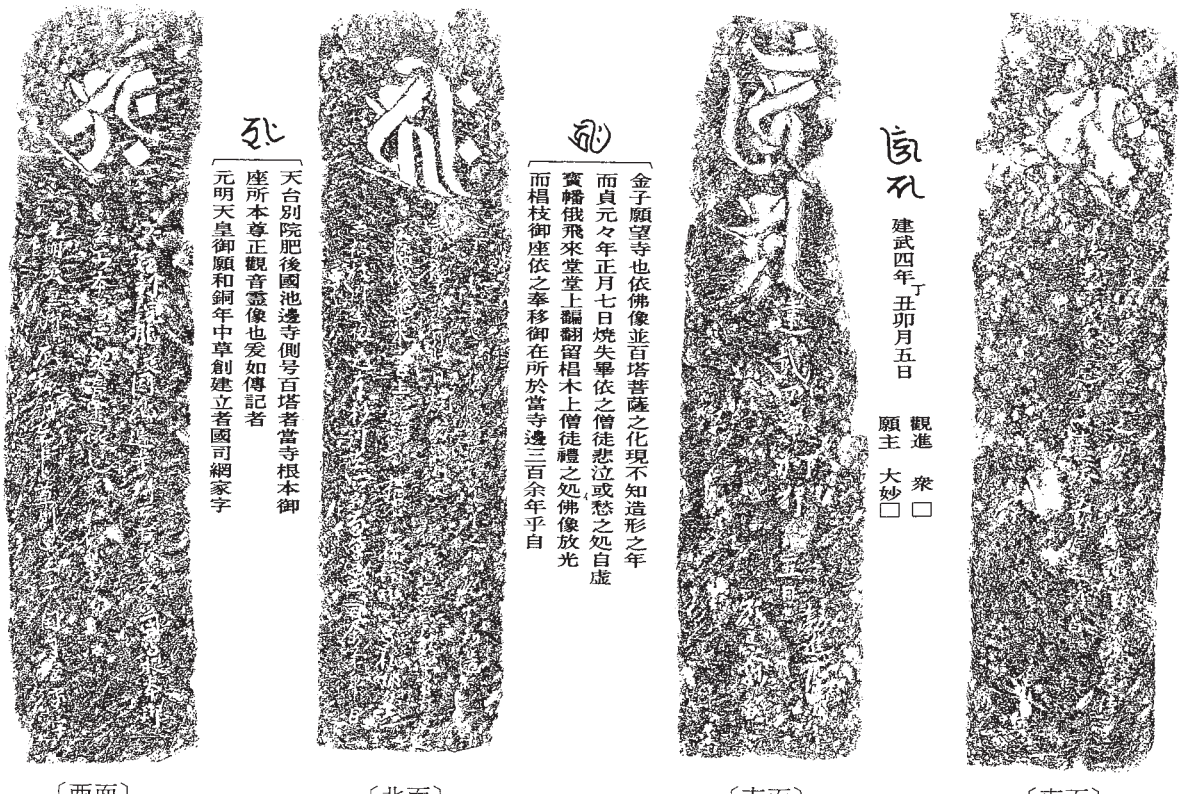
金子塔の周辺からは９世紀のものと思われる土器片が採集され、百塚地区と共存する遺跡の存在が予想されたため、先ず地形の確認と測量を目的として平成18年度末に周辺の伐採作業をおこなった。その結果、沢の両側に人為的と思われる平場と石積みがいくつも発見された。平成19年度から確認調査を実施しており、烏帽子地区のような９世紀代の石積み遺構を主体とした遺跡が確認されている。今後は、遺構の確認と遺跡範囲の把握のために調査を実施する予定である。

（6） 前原地区

百塚地区の東側で、平川（たいらがわ）の南岸は字前原（まえのはる）という。妙観山から朝出（あさで）山に連なる峰からの急斜面と百塚からの緩斜面とが、平川の氾濫原に重なっていく地形で、百塚からの緩斜面に遺物が散在している。平川の南岸に一部字平居屋敷（たいらいやしき）が入っており、その部分は川ではなく里道が境界になっている。その里道の前原側の



第22図：金子塔位置図



第23図：金子塔拓影図

角に、享保３年（1718）の一字一石経塚が立っている。

百塚Ａ地点と前原地区の境は雑木林・荒地になっており、その東隣の畑３段を平成14年度調査区とした。遺構は道路跡が２本検出された。古い方の道路（ＳＦ―01）は、西側から上段・中段の畑にて断続的に約50m検出された。上段では、道路両側に石列・石積みが築かれ、路面は砂利混じりで硬化させている。石列の幅は約３ｍである。中段では、石列はなく溝状の掘り込みと硬化した路面のみである。調査区南端付近で東に曲がっている。構築・廃棄の時期の特定が難しいが、百塚に至る参道の可能性があると考えている。ＳＦ―02は、01より新しい時期の道路跡である。石列はない。方向が異なっており、池辺寺には関係しない道路と考えている。

耕作土や遺物包含層からは池辺寺に伴う時期の遺物が出土するが、道路以外の明確な遺構はなかった。おそらくほとんどの遺物は百塚地区からの流れ込みで、この区域にまでは百塚地区の施設は広がっていなかったのではないかと推測される。ただし、参道脇に百塚とは別地区としての施設が存在した可能性はある。

(7)　平居屋敷地区

百塚地区の東側で、字前原の北側、平川の北岸を字平居屋敷という。西平山・東平山の急斜面が平川に向かって下り、平川に近づいて若干傾斜が緩くなったあたりに多くの住宅が建っている。遺物の散在は知られていないが、宅地内に五輪塔がある。僧坊があった区域ではないかと考えられている。

平成14年度に平川沿い（南岸）の２段の畑にてトレンチ調査を実施した。表土・遺物包含層ともに平川の氾濫堆積土で、遺構は検出されなかった。遺物は９世紀代のもので、これらも百塚からの流れ込みであろう。百塚の施設群からは外れていると判断される。

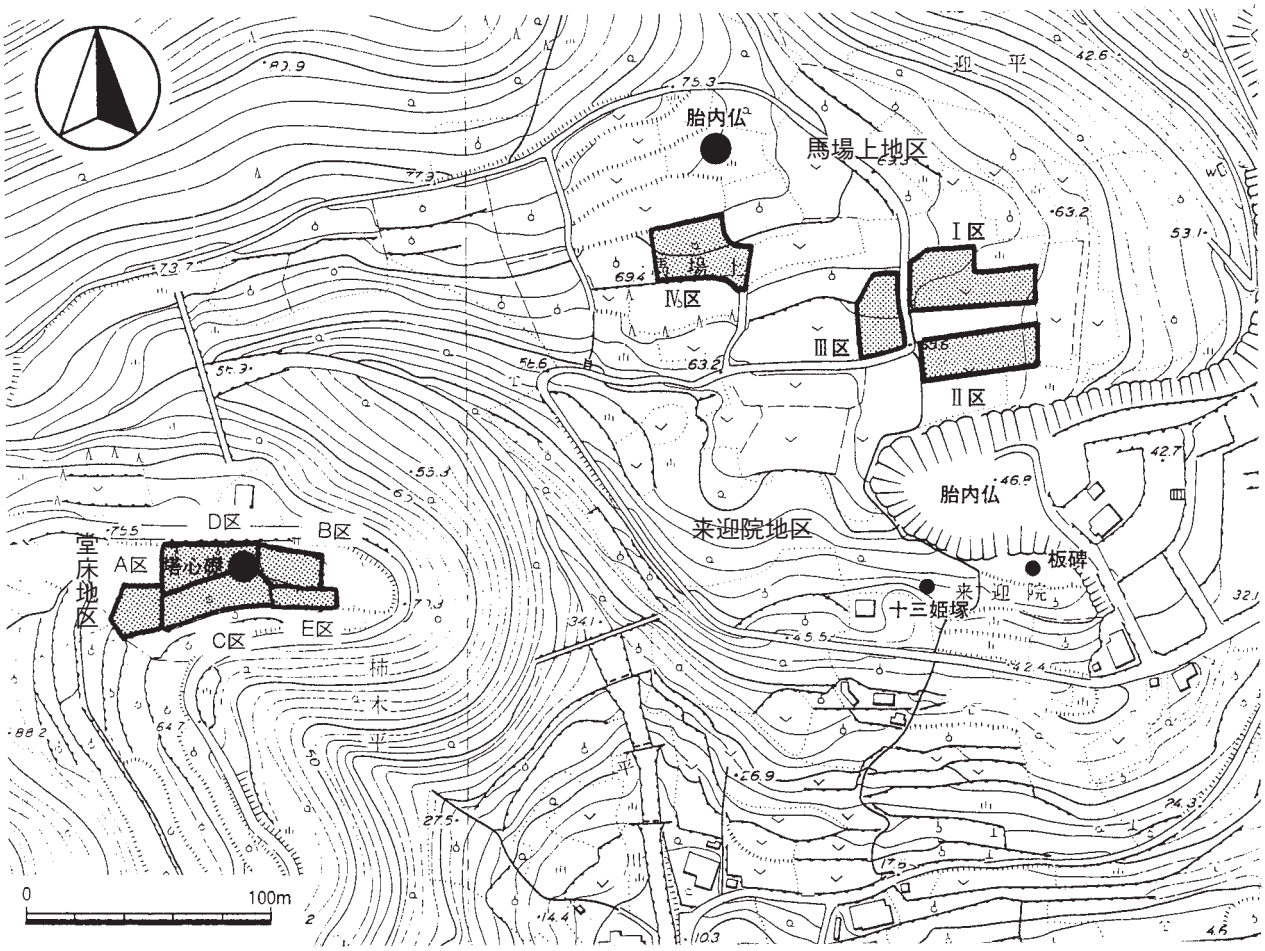
(8)　堂床地区

後期池辺寺跡と呼ばれる池の上地区から百塚地区に至る途中、妙観山の尾根が平川沿いに突き出た区域を堂床（どうとこ）と呼んでいる。字名は柿木平である。標高は75m前後である。百塚地区のある平川沿いの谷の入口にあたり、味生池推定地からも明瞭に眺めることができる。尾根の緩斜面は果樹園に造成され、石垣の中に塔心礎石が残存している。心礎は３分の１程度を欠損し、１ｍ強の大きさで厚さは30～40㎝。安山岩で、中央に直径16～18㎝、深さ10㎝弱の穴が穿たれている。瓦が多く採集され、塔跡地と想定されている。現在の道路は尾根の下を通っているが、旧来の山道は尾根のつけねあたり、心礎石より上位を通っていた。現道路の拡張工事の際に発掘調査がおこなわれ（県教委）、瓦が多く出土している。

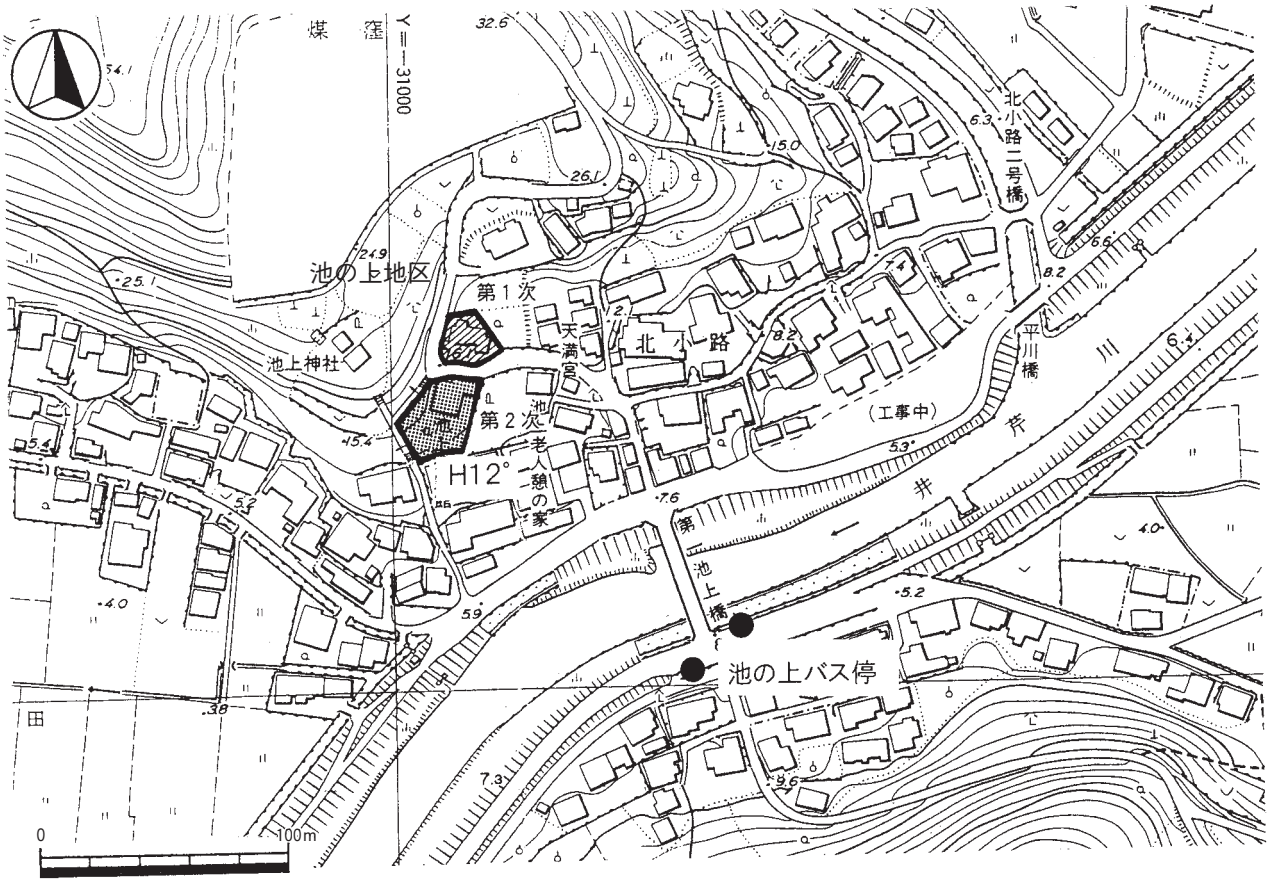
昭和34年、松本雅明氏により出土瓦と心礎石の紹介と塔跡の想定がなされた。昭和61年度以降、５枚の畑でトレンチ調査を実施した。昭和61年度は、Ａ・Ｂ地点で調査をおこなった。Ａ地点は最も西端で、高い位置にある。４ｍ程の大岩の脇から土器が多量に出土した。ほとんどが灯明皿に使用した土師器坏類で、９世紀前葉のものと思われる。百塚の整地土に含まれる土器と同じ時期のもので、創建時のものといえる。烏帽子地区ＳＫ―01のような埋納（廃棄）遺構であろう。他に硬化面・焼土が検出されている。

平成６年度には、心礎石南側の畑（Ｃ地点）で調査をおこなった。小規模なピットが検出されただけであった。平成11年度は、Ｃ地点の北側、Ｂ地点の南側の畑で調査をおこなった。Ｃ地点北側の畑は数十年前に削られており、畑の東南隅の高まりに心礎石があって、周囲にもいくつかの石があったらしい。塔跡の基壇と礎石が元位置で残っていたのかもしれない。西端にてピットが検出されただけで、他に遺構はなかった。耕作土の下は岩盤の所が多く、畑全体が大きく削られたことが確認できた。Ｂ地点南側も同様で、遺構はなかった。

堂床地区では、遺跡の残存状態は悪く、遺構は壊滅に近い。しかし、耕作土内には多量の遺物が含まれ、遺跡の内容を示唆している。瓦が特に多い。瓦は百塚地区と同じもので、同存していたことがわかる。堂



第24図：堂床地区・馬場上地区・来迎院地区位置図



第25図：池の上地区位置図

床からは小型の瓦が出土し、塔跡独自のものと想定されている。土器も多く、9世紀前葉から9世紀後葉のものがあり、やはり百塚と同じである。耕作土から二彩陶器と思われる小壺片も出土しており、表土の扱いにも留意しなければならない。

(9) 馬場上地区

馬場上地区とその南に隣接する来迎院地区は、堂床地区から北東に約500m、東平山から南東に延びた尾根端の丘陵地で、味生池推定地に突き出すように接している。堂床地区や池の上地区がある妙観山から延びる丘陵とは、平川による深谷によって隔てられている。丘陵上は傾斜が緩やかであるが、周囲の斜面は急傾斜が多い。馬場上は小字名で、読みは「ばばのうえ」と思われるが、地元では皆「ばばどん」と呼んでいる。平川の流れる谷は東に開口し、正面に味生池をはさんで花岡山が位置する。馬場上・来迎院地区は堂床地区とともにその中間地点に位置し、池辺寺の主要地点にあたることは地形からも容易に想定される。

市道北側に雑木林地が残るが、ほとんどが開墾されて畑となっている。雑木林の西半分も以前は畑であった。開墾は昭和の始めから戦後まもなくで、人力による。その後畑の一部では、大岩の撤去に重機を使用しているが、部分的である。耕作土には古代・中世・近世の遺物を含む。昭和20年頃に金銅製胎内仏（聖観音立像）が採集されている。

平成14年度に確認調査を実施した。馬場上丘陵中位（Ⅳ区）と来迎院との境の谷地付近（ⅠⅡⅢ区）の4か所である。Ⅰ区では、東側には中世期の遺物包含層が堆積し、遺構は溝・土坑・柱穴が検出されている。Ⅱ区では、東側に古代と中世の遺物包含層が残り、溝・土坑・柱穴が検出されている。Ⅲ区では、南西側に中世の包含層（谷埋没土）が残る。他に土坑が検出されている。Ⅳ区は、南側に2枚の包含層が残り、古代・中世とも遺構が密集していた。古代では溝・土坑・道路、中世では溝・地下式坑・柱穴が検出されている。熊本では、地下式坑は寺院から検出され、僧侶の墓である事例が多い。よって、中世の遺構は寺に関連する可能性が高い。古代の遺構・遺物が池辺寺に関連するかは、まだわかっていない。

平成17～19年度には熊本県教育委員会による県道建設に伴う確認調査が実施され、遺跡が残存していることが確認された。

(10) 来迎院地区

来迎院（らいごういん）地区は馬場上地区の南に小さな谷を隔てて隣接し、馬場上地区のある丘陵の南端部と味生池に向かって下る南面の急崖である。東・南側崖下は宅地であるが、斜面と丘陵上はすべて畑地であった。昭和40年代より東側から土取りが断続的に行われ、丘陵を大きくけずっている。来迎院地区でも耕作土に遺物を含み、古代・中世・近世の土師器・陶磁器などが採集される。明治時代に金銅製胎内仏（聖観音立像）が採集されている。土地所有者らの話では「馬場上には何もないが、来迎院には陶磁器・土器・瓦などが多く、耕作の邪魔であった」らしい。斜面の下位からも「素焼きの皿が大量に出た」と言われている。現在、丘陵端に永禄3年（1560）の板碑が残っている。南側斜面の中位には「十三姫塚（じゅうさんひめづか）（金子塚）」と呼ばれる天保2年（1831）の石碑があり、五輪塔が集められている。五輪塔は南側斜面一帯に多くみられ、石垣に転用されているものも多い。

馬場上地区と同様、平成17～19年度に県教育委員会文化課が県道建設に伴う確認調査を実施している。中世を主体とした石列・土坑などが確認されている。また、中世のものと思われる胎内仏（観音座像）や古代・中世の土器・陶磁器・瓦が出土している。斜面下の味生池推定地西側（平川南岸）の字煤窪でも発掘調査が実施され、石列・流路などの他、多くの遺物が出土している。周囲には五輪塔も多く、来迎院から一連の遺跡のようである。

（11）東平山地区

東平山（ひがしたいらやま）は平集落の北側の山で、集落への南斜面一帯と馬場上地区西側の尾根が字東平山となっている。南斜面は傾斜が強く、歩くことも困難である。南東に延びる尾根は比較的傾斜が緩く、特に2か所に平坦な区域がある。この尾根が平野に突き出た部分が馬場上地区である。北側・北東側斜面は急傾斜であるが、ミカン畑に開墾されている所が多い。北・北東斜面は谷尾崎町である。

東平山地区では、山頂・尾根部分にて平成13年度に踏査を実施したのみで、確認調査の事例はない。開墾された所以外に地面が露出した所はなく、茂った雑木や草の中に岩が点在しているだけである。尾根上の平坦地に小礫を集めた箇所があったが、いつの時代のものかわからない。独鈷山のような古代の祭祀遺構の可能性もあり、将来の調査対象地とすべきである。開墾地において銅製の燭台？が採集されており、時代は不明確であるが池辺寺に関連があるかもしれない。南斜面は雑木と竹が混在し、台風による倒壊のため歩くことはできなかった。

（12）池の上地区

妙観山の裾が南東に延びた先端部分に位置する。井芹川をはさんで独鈷山と対峙している。池上町字北小路に所在するが、古くより「池の上（いけのうえ）」と呼ばれている。明治初めの廃仏毀釈までは、池辺寺はこの地にあった。池辺寺の寺号を「独鈷山功徳池辺寺龍池院」とするが、地誌をみると近世中頃までは現在の妙観山を独鈷山と呼んでいた可能性がある。

斜面に3段の平坦地が設けられ、最高位に池上神社が鎮座している。池上神社は、明治4年（池辺寺の廃寺直後）に独鈷山にあった日吉神社を移設したものである。池上神社参道を下ると石崎八幡社の鳥居がある。石崎八幡社は正保4年（1647）に現池上神社の東側に勧進されたが、昭和12年頃に池上神社に合祀された。明治より後は、上段は神社に、下段は村役場に、中段には明治40年に日露戦争紀念堂（現公民館）が建てられた。神社境内には多くの石造物が残り、遅くとも応永3年（1396）には池辺寺が当地にあったと想定されている。

池の上地区では2回の発掘調査が実施されている。第1次調査（池の上遺跡）は、平成7年度に個人専用住宅建設に伴い発掘調査が行われた。東面の石垣・石段が検出されている。明治時代のものかと思われるが、近世に遡る可能性も否定できない。第2次調査は、平成12年度、中段にある紀念堂を現公民館に建て替える際に実施した。第1次調査の石垣・石段に対応する石垣、近世・中世・古代の土坑や柱穴、古墳時代の住居・柱穴が検出されている。柱穴は多かったが、建物の想定復元はできていない。『文政九年（1826）飽田郡池田手永寺社本末御改ニ付寺院間数改帳』にある堂舎配置図との比較も困難である。中世の遺構・遺物はほとんどが前半期のもので、多量の陶磁器が出土した。近隣の上高橋高田遺跡の事例から、池辺寺ではなく港関連の遺物とも考えられる。14世紀以降の遺構は不明確である。中世後半・近世における池辺寺の堂宇は、中段に主要なものはなかったようである。古代においては7世紀後半から9世紀後半まで遺物が出土しているが、特に8世紀後葉～9世紀前葉の遺物が多い。円面硯や少量の瓦も出土しているが、これらが池辺寺に関連するものとする明確な根拠はなく、煮沸・貯蔵具などの生活用具が多いことを考えると集落遺跡のようにも思える。

（13）独鈷山

妙観山の南側、現在の井芹川と坪井川にはさまれた所に独鈷（どっこ）山と呼ばれる円錐形の山がそびえている。周辺の山々は複数の峰が連なっているが、独鈷山は平地に独立した山である。独鈷山には池辺寺に関連するものが多く（現存しないものも）、龍が天に昇ったとされる「登天石（兜率石）」、独鈷を洗う「妙椙水池」、八王子宮、山王社、妙見堂大榎、独鈷が掛かった松、醫王寺、金光寺、石薬師像、板碑があったと

される。山の北半分は池上町、南半分は城山上代町に分かれる。字名では、二王堂・神傳・山王平・高野辺田が興味深い。山頂からは経塚が発見されたらしい。

平成10年度、独鈷山頂上から南斜面において大規模な公園開発が行われ、事前に若干の調査が行われた。独鈷山の斜面には数m大の岩が点在しており、そのいくつかを調査したところ、「大岩の上から脇において、小礫を積み上げ、火を焚く」「大岩の根元に浅い土坑を掘り、埋納・土器供献や焚火をおこなう」という2種類の祭祀遺構が検出された。遺物は8世紀後半～10世紀頃のものが出土している。時期的にも池辺寺に関連する可能性がある。

(14) 味生池

味生池（あじうのいけ）は、『続日本紀』には肥後国司道君首名（みちのきみのおびとな）が和銅年間（708～715）に築いた灌漑用の池と記されている。地誌などによると、馬場上・来迎院地区の丘陵と万日山・独鈷山に囲まれた低地一帯にあったとされ、古くは「阿治宇池」と書いたらしい。加藤清正の代に埋め立てられ水田となったという。味生池推定地としての遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）とは扱っていないため、調査事例は少ない。

昭和61年度、味生池推定地の南端あたりにおいて確認調査が実施された。「清水原（しみずばる）遺跡」という遺物散布地であったが、遺構・遺物は検出されていない。その後、水路工事・道路工事の際に土層を確認したが、遺構・遺物が見つかったことはない。平成17年度には、県教育委員会によって県道建設に伴う確認調査が実施された。西端にあたる箇所で多量の木材が出土したが、時期がわからない。昭和初期、妙観山南裾（池の上地区南側）と独鈷山の北裾（字二王堂）の窪地に井芹川を通す工事でも多量の木材（松らしい）・炭化材が出たらしく、埋め立ての証拠ではないかといわれている。

2　遺物

(1)　土器（第26図）

池辺寺跡からは、これまでの調査で大量の土器が出土している。出土土器のほとんどは土師器坏で、灯明皿として使用されたものである。各遺構の一括資料では、土師器坏に少量の土師器椀・盤、須恵器坏などが伴っている。以下、時期ごとに一括資料を紹介する。

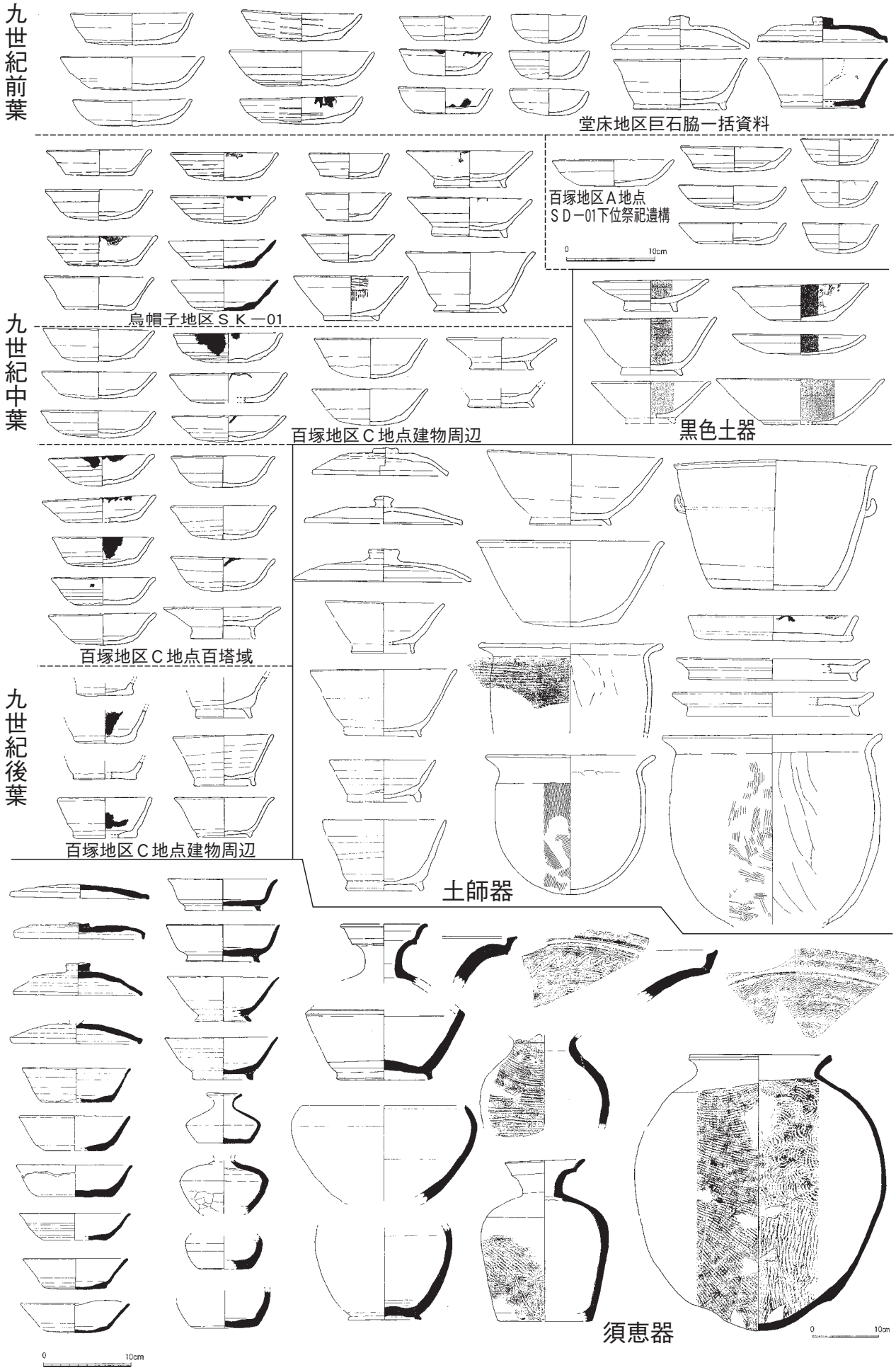
9世紀前葉（9世紀第1四半期頃）
- 堂床地区Ａ地点　　巨石脇一括資料（『池辺寺跡Ⅰ』報告書）
- 百塚地区Ａ地点　　ＳＫ―03（『池辺寺跡Ⅲ』）

9世紀前葉～中葉（9世紀第2四半期頃―古期）
- 百塚地区Ａ地点　　ＳＤ―01下位祭祀遺構（『池辺寺跡Ⅲ』）

9世紀中葉（9世紀第2四半期頃―新期）
- 烏帽子地区　　ＳＫ―02（『池辺寺跡Ⅱ』）
- 百塚地区Ａ地点　　ＳＸ―02（『池辺寺跡Ⅲ』）

9世紀中葉（9世紀第3四半期頃―古期）
- 烏帽子地区　　ＳＫ―01（『池辺寺跡Ⅱ』）
- 百塚地区Ａ地点　　ＳＸ―01（『池辺寺跡Ⅲ』）
- 百塚地区Ａ地点　　ＳＸ―03（『池辺寺跡Ⅲ』）

9世紀後葉（9世紀第3四半期頃―新期～第4四半期）
- 百塚地区Ｃ地点　　基壇部＝建物周囲溝（『池辺寺跡Ⅰ』）
- 百塚地区Ｃ地点　　斜面部＝百塔域（『池辺寺跡Ⅰ』）



第26図：出土土器実測図

他に、百塚地区Ｃ地点ＳＳ―106背後から須恵器甕が出土している（『池辺寺跡Ⅴ』）。烏帽子地区ⅡＤ層（ＳＤ―02）からは多量の生活容器（土師器甕、須恵器壺・甕）が出土しており（『池辺寺跡Ⅷ』『池辺寺跡Ⅸ』）、８世紀後半～９世紀中頃のものと思われる。

池の上地区（『池辺寺跡Ⅳ』）では、７世紀後半から現代までほとんど途切れなく遺物が出土している。古代では特に８世紀後半の土器が多く出土しているが、池辺寺跡に関連するものかわからないため掲載していない。14世紀以降の遺物は、池辺寺に関連するものと思われる。

馬場上地区（『池辺寺跡Ⅵ』）・来迎院地区（県調査）でも、８世紀後半から土器が出土する。中世では14～15世紀に主体であり、池辺寺に関連する可能性が高いと考えられる。

(2) 瓦（第27図）

古代の瓦は、百塚地区と堂床地区から多量に出土している。烏帽子地区・来迎院地区ではごく少量出土しているが、瓦葺き建物があったとは考えにくい。

百塚地区ではＡＢＣ地点とも瓦が出土するが、特にＣ地点建物群周囲の溝（特にＳＢ―01の東・西）から集中的に出土し、そこから離れるほど出土量は少なくなる。百塔域からは出土しない。

平成16年度までの瓦の出土量は1045.01kgで、うち丸瓦392.73kg、平瓦521.74kgである。丸瓦のうち1/3は軒丸瓦、平瓦のうち1/2が軒平瓦である。全建物あるいは中心建物の屋根全体が瓦葺きと想定される数値ではなく、中心建物のみ、しかも「甍棟（いらかむね）」であったと考えられる（『池辺寺跡Ⅸ』）。

以下の瓦の分類・編年は、金田一精氏の論を引用する（「池辺寺瓦考」）。

百塚地区からは軒丸瓦３種類・軒平瓦10種類、堂床地区からは軒丸瓦４種類・軒平瓦５種類がある。そのうち軒丸瓦２種類・軒平瓦１種類が共通している。国分僧寺跡・国分尼寺跡・水前寺（すいぜんじ）廃寺跡・二本木遺跡群・稲佐（いなさ）廃寺跡・田島（たじま）廃寺跡・八ノ瀬戸（はちのせと）窯跡出土の瓦に同笵のものがある。八ノ瀬戸窯跡からは軒平Ⅰ・Ⅱ類と鬼瓦の同笵例がある。軒丸瓦Ⅱ・Ⅳ類、軒平瓦Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ類を９世紀前葉段階とし、その大半が創建時のものと考えられている。うち軒丸瓦Ⅱ類は、浄水寺（じょうすいじ）出土瓦との類似から「828年前後＝９世紀第１四半期末～第２四半期」の生産と想定されている。軒丸瓦Ⅴ類、軒平瓦Ⅸ・Ⅹ類が補修瓦と考えられ、百塚Ａ地点ＳＸ―02出土土器から「９世紀中葉（第２四半期末）～後葉」と想定されている。

堂床地区では遺跡の残存状態が悪く、耕作土・造成土に多量の瓦が含まれている。長辺１ｍ程の心礎石があり、塔跡と想定されている。瓦の量・比率などの分析はできていない。堂床地区でのみ出土している軒丸瓦Ⅰ類・軒平瓦Ⅰ類は小型の類で、塔に伴う特殊瓦であろう。

鬼瓦は百塚地区から出土している。現在のところ４個体が確認されているが、同種類である。大宰府式鬼瓦を祖形とし、渡鹿（とろく）廃寺に同笵事例がある。中村廃寺出土鬼瓦の次段階のもので、中村廃寺鬼瓦は９世紀初頭頃と想定されている（栗原和彦「池辺寺の鬼瓦」）。

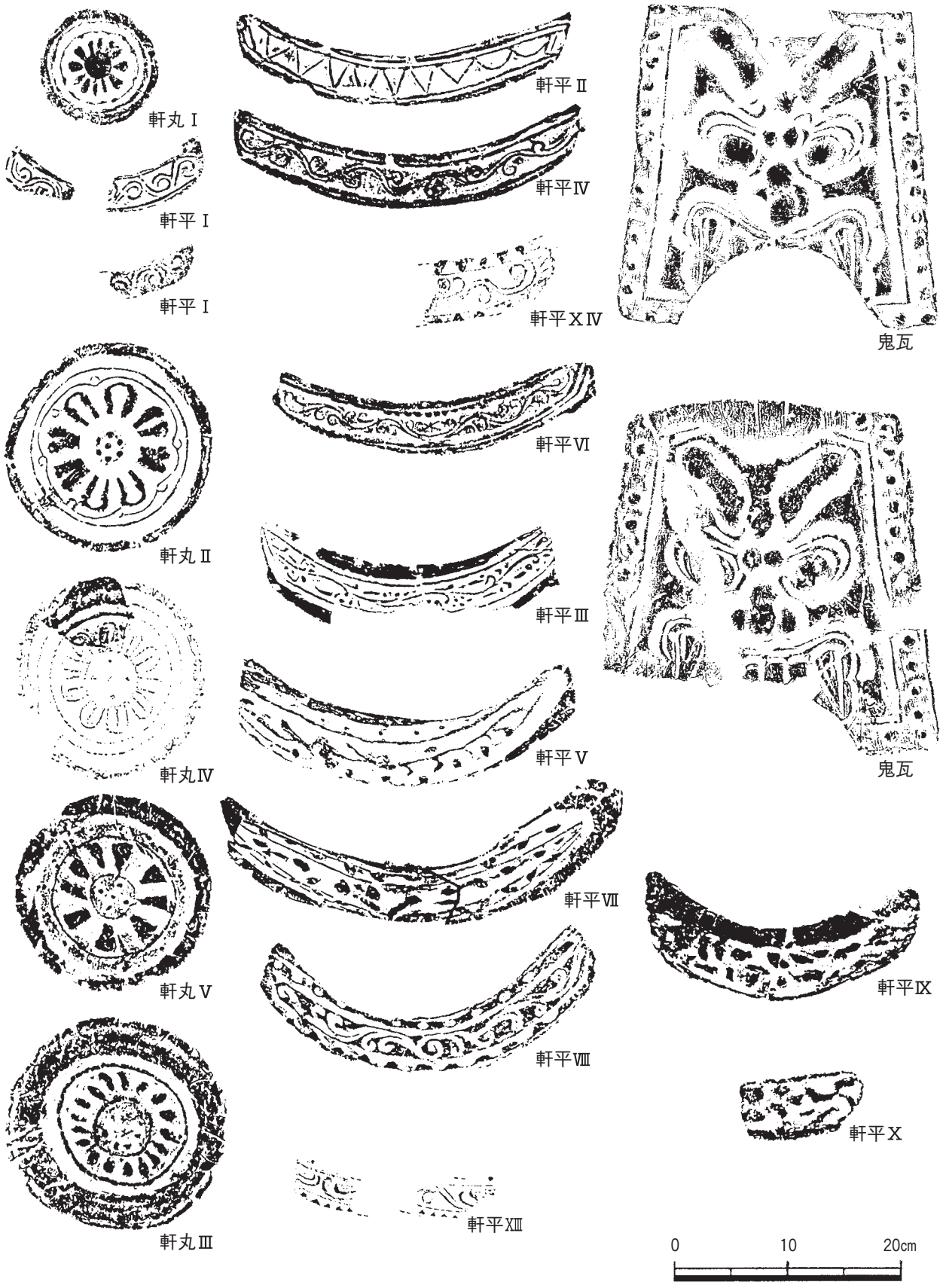
(3) 重要遺物（古代）（第28図）

各地区から重要遺物が出土している。

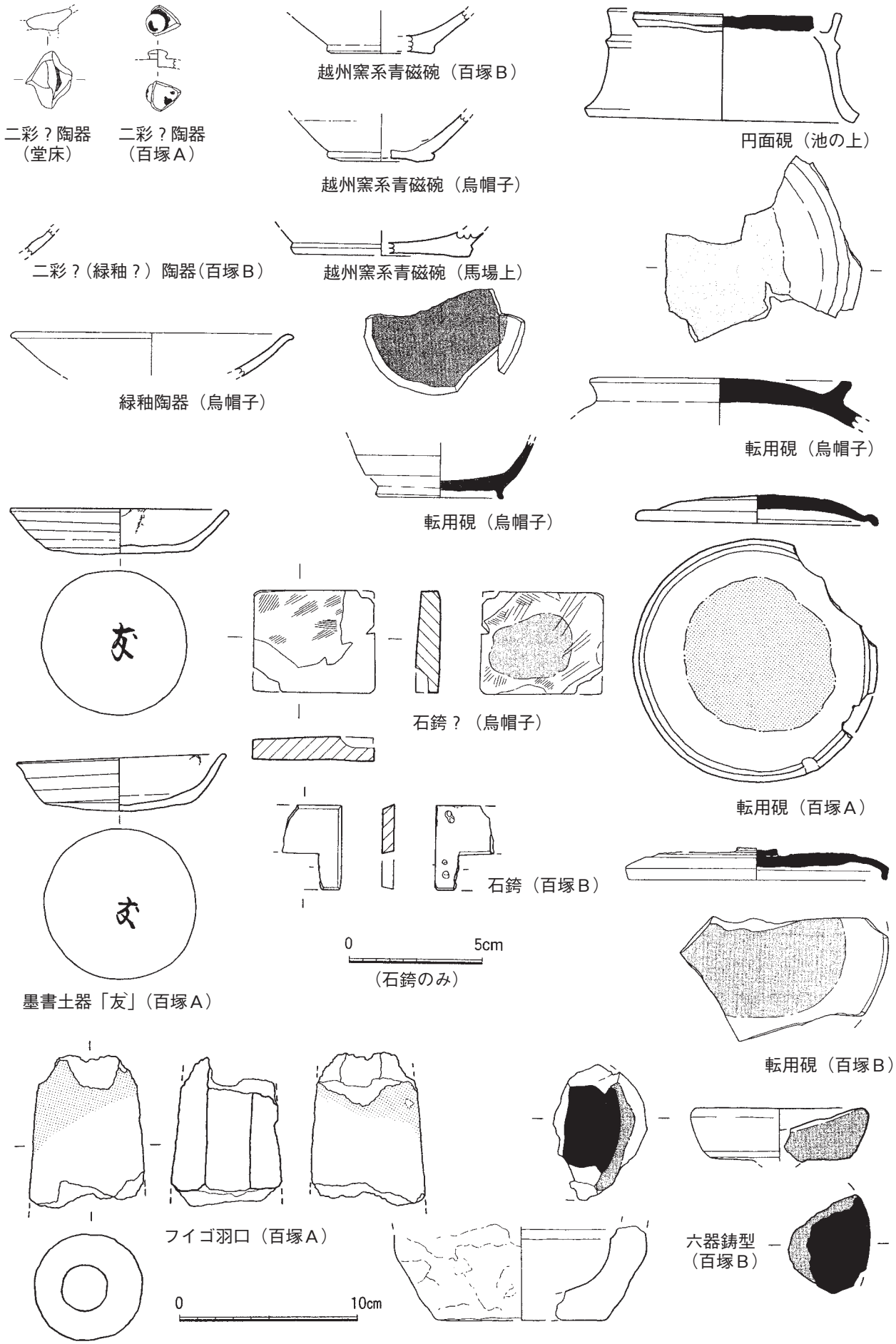
池の上地区の古代遺物は池辺寺関連かは不明確であるが、以下に含めている。

①硯（すずり）

円面硯	１点	池の上地区			
転用硯（墨）	17点	百塚地区	転用硯（朱）	２点	烏帽子地区
	６点	烏帽子地区		１点	堂床地区
	１点	堂床地区		１点	池の上地区
	５点	池の上地区			



第27図：軒瓦・鬼瓦拓影図



第28図：重要遺物実測図

②墨書土器

土師器坏　13点（「友 or 祓」）百塚地区（Ａ地点ＳＤ―01下位祭祀遺構）

土師器坏　１点（「？」）烏帽子地区

須恵器椀　１点（「依」）池の上地区

③陶器（二彩・緑釉）

二彩：百塚地区　１点、堂床地区　　１点

緑釉：百塚地区　１点、烏帽子地区　１点、池の上地区　１点

④磁器

越州窯系青磁：百塚地区　４点、烏帽子地区　１点、馬場上地区　１点、池の上地区　９点

邢窯・定窯系白磁：烏帽子地区　１点

⑤帯飾り（銙帯具）

石製巡方　　１点　百塚Ａ地点

石製巡方？　１点　烏帽子地区

⑥製鉄関連遺物

羽口・滓など多数　　百塚Ａ地点・百塚Ｂ地点

羽口　　百塚Ｃ地点

滓　　堂床地区・馬場上地区・池の上地区

⑦製銅関連遺物

鋳型・炉床など　　百塚Ｃ地点・百塚Ｂ地点

⑧銅製品

小型（飾具？）　　百塚Ｃ地点・百塚Ａ地点

Ⅲ　文献一覧

寛文９年（1669）　北島雪山『国郡一統志』（昭和46年復刻版、青潮社）

元禄２年（1689）　辛島道珠『肥後名勝略記』（昭和55年復刻『肥後国地誌集』青潮社）

宝永６年（1709）　井澤蟠龍『肥後地誌略』（昭和55年復刻『肥後国地誌集』青潮社）

享保13年（1728）　成瀬久敬『新編肥後国誌草稿』

享保15年（1730）　水足屏山『肥後国陣跡略誌』

明和９年（1772）　森本一瑞『肥後国誌』

（水島貫之編　明治17年、熊本活版舎）

（後藤是山編　大正５年、九州日日新聞社／昭和47年復刻版、青潮社）

天明４年（1784）　寺本直廉『古今肥後見聞雑記』（昭和55年復刻『肥後国地誌集』青潮社）

天保12年（1841）　八木田政名『新撰事蹟通考』（昭和46年復刻版、歴史図書社）

天保12年（1841）　伊藤常足『太宰管内志』（昭和９年・昭和53年復刻版、太宰管内志刊行会）

明治16年（1883）　『古社寺堂塔調（古塔調査録）』熊本県（昭和27年復刻版『熊本県資料集成第５集』日本談義社）（昭和60年再復刻版、図書刊行会）

明治39年（1906）　角田政治『熊本市 飽託郡誌』長崎書店（昭和49年復刻版、名著出版）

大正７年（1918）　古賀徳義・平野乍・村上憲吉「道君首名の遺跡」『熊本県史跡調査報告第一回』熊本県（昭和49年復刻版、青潮社）

昭和29年（1954）　乙益重隆『肥後上代文化史』日本談義社

昭和32年（1957）　安達寿男『高梁史話』高橋公民館
昭和32年（1957）　松本雅明「古代」『熊本県の歴史』文画堂
昭和33年（1958）　中川斎「熊本に於ける道君の遺跡」『日本談義』№86、日本談義社
昭和33年（1958）　中川斎「再び道君の遺跡に就いて」『日本談義』№90、日本談義社
昭和34年（1959）　松本雅明「池辺寺考」『熊本史学』第17号、熊本史学会
昭和44年（1969）　『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
乙益重隆「池辺寺廃寺址」ほか
鈴木喬「後期池辺寺趾」ほか
東光彦「独鈷山上の石祠」ほか
坂為清「仁王堂の板碑」ほか
森下功「池辺寺文書」
昭和45年（1970）　小山正『新編肥後風土記（一）』
昭和47年（1972）　鈴木喬「味生池と池辺寺―熊本市文化財調査より―」『日本談義』№261、日本談義社
昭和49年（1974）　『高橋の百年』高橋小学校百周年記念事業実行委員会
昭和49年（1974）　牛島盛光編「味生の池と池辺寺」『肥後の伝説』第一法規出版
昭和50年（1975）　井上辰雄「道君首名研究ノート」『法文論叢』第36号史学篇、熊本大学法文学会
昭和50年（1975）　多田隈豊秋「池ノ上笠塔婆（金子塔）」『九州の石塔』上巻、西日本文化協会
昭和55年（1980）　森下功・松本寿三郎『肥後国地誌集』青潮社
昭和55年（1980）　村井眞輝「味生池考」『古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
昭和56年（1981）　村井眞輝「池辺寺跡」『九州古瓦図録』九州歴史資料館
昭和58年（1983）　『県内主要寺院　歴史資料調査報告書（二）熊本市～城南地区　資料篇・図版篇』熊本県立美術館
昭和59年（1984）　廣瀬正照『肥後古代の寺院と瓦』廣瀬正照遺稿集刊行会
昭和60年（1985）　阿蘇品保夫「中世肥後金峰山系の修験について―その検証と展開への試論―」『山岳修験』創刊号、山岳修験学会
昭和62年（1987）　志水良雄「熊本市池辺寺の記録　「池水樵語」について」『石人』№333第28巻６
昭和63年（1988）　坂口雅柳「熊本市池ノ上町池辺寺趾「金子塔」の梵字に就いて」『肥後金石研究』創刊号、肥後金石研究会
平成元年（1989）　富田紘一「奈良、平安期」『市制百周年記念　熊本・歴史と魅力』熊本市
平成２年（1990）　前川清一「金子塔の銘文について」『肥後金石研究』第２号、肥後金石研究会
平成３年（1991）　鶴嶋俊彦「肥後に於ける歴史時代の現状と課題」『交流の考古学―三島格会長古稀記念号―』肥後考古学会
平成５年（1993）　大城康雄『池辺寺跡発掘調査概報Ⅰ』熊本市教育委員会
平成５年（1993）　大城康雄「熊本県熊本市池辺寺廃寺跡」『日本考古学年報』44、日本考古学協会
平成６年（1994）　大城康雄「池辺寺跡」『考古学ジャーナル』№382、ニュー・サイエンス社
平成６年（1994）　「池辺寺跡」ほか『熊本市の文化財』熊本市教育委員会
平成８年（1996）　『新熊本市史　別編第二巻民俗・文化財』熊本市
今村克彦「池辺寺跡」
大倉隆二「池辺寺伝来宝物」ほか
鈴木喬「金子塔」ほか

平成８年（1996）　『新熊本市史　史料編第一巻考古資料』熊本市
大城康雄「池辺寺跡」ほか
前川清一「池上笠塔婆（金子塔）」ほか
平成８年（1996）　大城康雄・網田龍生・金田一精・美濃口雅朗・竹田宏司
『池辺寺跡Ⅰ（百塚遺跡Ｃ地点・堂床遺跡発掘調査報告書）』熊本市教育委員会
付論：澤村仁「池辺寺の建築と古代の山寺」
富田紘一「西山地区の古瓦関係資料の紹介」
栗原和彦「池辺寺の鬼瓦」
阿蘇品保夫「肥後金峰山系の修験と池辺寺」
鈴木喬「文献より見た池辺寺史」
坪井清足「遺跡の保存について」
平成９年（1997）　大城康雄「謎の池辺寺」『図説熊本県の歴史』河出書房新社
平成10年（1998）　『新熊本市史　通史編第一巻自然・原始・古代』熊本市
板楠和子「池辺寺について」ほか
平成10年（1998）　『新熊本市史　通史編第二巻中世』熊本市
阿蘇品保夫「金峰山系の修験」
大倉隆二「旧仏教の展開」
平成10年（1998）　高田泰史『平成肥後国誌』平成肥後国誌刊行会
平成10年（1998）　網田龍生「池辺寺跡」『今どきの考古学　くまもと考古速報展』熊本県立装飾古墳館
平成11年（1999）　網田龍生『池辺寺跡Ⅱ（平成８・９年度発掘調査報告書）』熊本市教育委員会
平成11年（1999）　板楠和子「池辺寺根本中堂と百塔」『熊本県の歴史』山川出版社
平成13年（2001）　佐藤征子「池辺寺伝承の変容をめぐって」『市史研究くまもと』第12号、熊本市
平成13年（2001）　網田龍生『池辺寺跡Ⅲ（平成10・11年度発掘調査報告書）』熊本市教育委員会
平成14年（2002）　網田龍生『池辺寺跡Ⅳ（平成12年度発掘調査報告書）』熊本市教育委員会
平成15年（2003）　網田龍生『池辺寺跡Ⅴ（平成13年度発掘調査報告書）』熊本市教育委員会
平成15年（2003）　「あたらしい仏教」『遺跡が語る　くまもとのあゆみ～白川編～』熊本県教育委員会
平成15年（2003）　板楠和子「肥後古代の仏教～浄水寺と池辺寺」『熊本歴史叢書２　古代下　先人の暮らしと世界観』熊本日日新聞社
平成16年（2004）　網田龍生『池辺寺跡Ⅵ（平成14年度発掘調査報告書）』熊本市教育委員会
平成17年（2005）　網田龍生『池辺寺跡Ⅶ（平成15年度発掘調査報告書）』熊本市教育委員会
平成17年（2005）　板楠和子「池辺寺に関する基礎的考察―百塚遺跡Ｃ地点を中心として―」
『熊本大学日本史研究室からの洞察』松本寿三郎先生・工藤敬一先生古稀記念論文集刊行委員会
平成18年（2006）　網田龍生『池辺寺跡Ⅷ（平成16年度発掘調査報告書）』熊本市教育委員会
平成19年（2007）　網田龍生『池辺寺跡Ⅸ（平成17年度発掘調査報告書）』熊本市教育委員会
付論：金田一精「瓦からみた池辺寺の屋根景観―屋根形態の復元案」
平成19年（2007）　金田一精「池辺寺瓦考」『肥後考古』第15号、肥後考古学会
平成19年（2007）　大城康雄「熊本県熊本市池辺寺跡」『平安時代山岳伽藍の調査研究』古代學協会研究報告第１号、古代学協会
平成20年（2008）　網田龍生『池辺寺跡Ⅹ（平成18年度発掘調査報告書）』熊本市教育委員会